

# 地球市民による 地域資源を活用した SDGs・ESD カリキュラム開発



平泉町



気仙沼市



大崎地域



只見町



## 目 次

---

はじめに .....	1
<b>【紹介】</b>	
平泉町教育委員会 .....	2
気仙沼市教育委員会 .....	4
大崎地域世界農業遺産推進協議会 .....	6
只見町教育委員会 .....	8
<b>【報告】</b>	
平泉町教育委員会 .....	11
気仙沼市教育委員会 .....	25
大崎地域世界農業遺産推進協議会 .....	41
只見町教育委員会 .....	55



# はじめに

この報告書は、2019年度の文部科学省の助成を受けた『地球市民による地球資源を活用したSDGs・ESDカリキュラム開発』の事業報告である。ESD/ユネスコスクール・東北コンソーシアムでは、2018年からのコンソーシアム事業で行ってきた東北地方におけるESD/SDGsを推進する地域拠点づくりを発展させてきた。2019年度では、東北地方のコンソーシアム事業を行っているサテライト地域のうち、先進的实践を取り組んできた4つのサテライト地域（平泉地域、気仙沼地域、大崎地域、只見地域）のESD/SDGsを活用した学校づくりのカリキュラムや地域づくりのプログラムを情報発信する取り組みを行った。

2019年度では、4つの地域の実践発表を中心に、第1回学びあいセミナー（6月22日）と第2回学びあいセミナー（8月19日）を開催して、各地域のカリキュラム・プログラムの検討を行い、さらに各地域で検討会を行って報告書の内容を整理してきた。また、4地域外のサテライト地域からも実践報告を学びあいセミナーや北海道・東北地方ユネスコスクール大会で報告し、来年度以降のカリキュラムやプログラム整理の準備を行った。

今回報告する4つのサテライト地域の特徴は、1つは世界遺産、世界農業遺産、エコパーク、震災復興地域といった求心力のある地域テーマを持っている地域であること。2つめはユネスコスクールなどの学校が、ESD/SDGsの授業実践に取り組んでいることである。3つめは学校でのESD/SDGsのカリキュラム作りだけでなく、学校と地域が連携しあいながら、地域でのESD・SDGsプログラムを発展させようとしているところである。

平泉町は、世界文化遺産を持続可能に維持発展させる『平泉学』を学校、社会教育、地域づくりの中で実践している。幼稚園～小学校～中学校での『平泉学』のカリキュラムは、授業の中で、課外活動の中で、さらに学芸会などの成果発表を通じて実践されている。学芸会での演劇活動は特徴的な内容である。また、社会教育での『平泉学』は、地区ごとの活動や学校の行事と結びついている。こうした成果を町では、町の『広報』にわかりやすく特集を組んで地域づくりのためのプログラムを提起した。

気仙沼市では、市内の幼稚園、小学校、中学校、高等学校のほとんどがユネスコスクールに加盟して、地域社会と連携しながらESD/SDGsのカリキュラム開発を行い、防災教育や海洋教育などに成果をあげてきた。地域づくりのプログラムについては、気仙沼のESD円卓会議方式を18年続け、学校と地域が連携するシステムを作ってきた。

大崎地域では、世界農業遺産「持続可能な水田農業を支える『大崎耕土』の伝統的水管理システム」の登録を受けて、ESD/SDGsの推進のため地域プログラムづくりを中心に取り組んでいる。地域づくりプログラムの内容は、①世界農業遺産内容の可視化と交流・関係人口の増加②農産物を通じた市民・都市の消費者の支援を受けるための農産物認証③世界農業遺産を支える持続可能な人材育成（小学生向けに副読本を作成）。

只見町では、ユネスコ・エコパークを中心テーマにした『只見学』が小中学校で取り組まれ、海洋教育の視点を入れた山と川と海のつながりを理解するカリキュラムを作り、「只見愛」を持った人材の育成が行われている。地域プログラムでは只見高校の内地留学の促進、地域経済が自律する地域産業づくりが企画されている。

2020年2月8日

コーディネーター 小金澤 孝昭

# 平泉町教育委員会

〒029-4192 平泉町平泉字志羅山45-2  
<https://www.town.hiraizumi.iwate.jp/>



## 過去に学び、今を見つめ、未来を考える 「全世代型平泉学」

世界文化遺産の町平泉では現世浄土のまちづくりを進めた先人の思いや歴史を学び、伝統文化などの地域の宝を受け継ぎ、すべての町民が学ぶ「全世代型平泉学」を進めています。その取り組みを発展させ平泉の価値と魅力を国内外に発信しながら持続可能な平泉の実現を目指しています。



毛越寺あやめ園をお散歩する園児たち

### 参加体験⇒知識行動⇒発信行動のプロセスで学ぶ

#### ● お散歩からガイド体験学習へ (幼保小中の系統だてた平泉学学習)

平泉の子どもたちは、町内の世界遺産・地域遺産・伝統文化から地域の人々の暮らしなどを通して地域を誇りに思う系統的な「平泉学」を学んでいます。その学習サイクルは、参加体験（見聞きし行事へ参加したりすること）、知識思考（資料から平泉をとらえ、話し合い、知識を深めること）、発信行動（町外の方々に平泉を発信すること）の学習をサイクル的に進めています。

幼稚園・保育所の子どもたちは街歩きのなかで身近な自然に触れ、謡の練習を通して平泉ならではの文化を感じています。小学校では、町の自慢や地域の祭り、産業と環境を調べ、その成果を町民の前で発表したりパンフレットにまとめたりしています。

中学生の平泉学学習では、最終目標を3年生としてのガイド体験に向けて、1年次の写経・座禅・発掘体験や平泉学検定への挑戦、2年次の防災学習、大文字火床づくり、3年次の修学旅行での平泉アピールなどに取り組んでいます。



自分たちが育てた特産品  
「黄金メロン」を販売する小学生



毛越寺、観自在王院跡を訪れた観光客を  
英語でガイドする中学生

## 世代間交流を図り、地域の宝を学ぶ行政区での平泉学

### ● 世代を結ぶ地域学習

平泉学を子どもたちだけでなく、地域ぐるみの学習へと拡大させるため「地域学習」の取り組みも行われています。町内21行政区それぞれの子ども会が主体となり、地域遺産であり史跡や伝統行事・風習、郷土芸能、郷土料理などをテーマとして学んでいます。子どもたちを中心に地域住民が集まる絶好の機会となっています。子どもたちが地域の宝に興味をもち、祖父母世代から地域の歴史や文化を教わる、それは子どもだけでなく、大人もふるさとの良さを再認識する機会になっています。

郷土への愛着と誇りを次世代に伝える地域学習をきっかけに、世代間交流が活発になり、地域コミュニティの再生につなげたい、地域を知り、地域を語れる子どもたちを増やしたいと願って取り組んでいます。



18区の老人クラブと子ども会による「郷土料理」昼食交流会の様子

## 平泉を伝える情報発信学習

### ● 黄金平泉情報発信プロジェクト

平泉ゆかりの地や全国の世界遺産地域を訪れ、平泉とのつながりを確かめ、訪問先での児童交流を通じて、見聞を広め、友好を深め、平泉の価値・魅力を積極的に発信することをねらいとして、2013年から「ジュニア平泉文化歴訪団」を組織して活動しています。

当初は、東北地方限定としていましたが、2018年からは「黄金平泉情報発信プロジェクト」として、訪問地を全国へ広げ、2018年には、弁慶終焉の地から生誕の地和歌山県田辺市を訪れ、本宮地区小学校の子供語り部の案内で熊野古道を歩き、互いに発信しあうことができました。また、2019年には、平清盛建立の広島県安芸の宮島を訪れ、宮島学園の児童に島内をガイドしていただき、発信交流を深めました。平和記念公園での貴重な平和学習もかけがえのない学びとなりました。今後も、「平泉を出て、平泉を考える」情報発信学習を継続していきたいと思えます。



和歌山県田辺市を訪問し、本宮地区の小学生からガイドを受ける平泉町の小学生

### ● 全世代型平泉学の深化に向けて

幼保小中の平泉学から地域学習としての平泉学へと広がりを見せてきたのですが、その継続を考えるだけでなく、先人の平和への願いを受け、今を見つめ、町の将来のあり方を考えるための課題解決型学習へと発展させていくことが、平泉が目指す「千年のまちづくり」にとっては欠かすことのできない全世代型平泉学なのです。

# 気仙沼市教育委員会

〒988-8502 気仙沼市魚市場前1-1

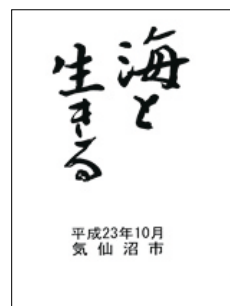


## 気仙沼 ESD が目指す「他者と共により良い未来を創造し、自分らしく幸せに生きるための教育」

気仙沼 ESD は、2002年の面瀬小学校の取り組みをスタートとし、地域の課題に向き合い、その課題を解決するために何が必要かを考える学習をとおして、持続可能な社会づくりに貢献できる人材育成に取り組んできました。

学習指導要領にも ESD の理念が反映され、今後一層 ESD の重要性が高まっているなかで、気仙沼市は ESD として、「他者<sup>※</sup>と共により良い未来を創造し、自分らしく幸せに生きるための教育」を進めています。気仙沼 ESD は、環境教育とか防災教育とか地域伝統文化教育とかの、特定の領域の教育を指すものではなく、このような「価値」に重きを置く教育全てを指しています。

※「他者」とは、「周囲・地域の人」であり、「現在の地球上の人」であり、「未来の人」です。



震災復興計画の  
キャッチフレーズ



## 地域に根ざした実践と多様な連携

市内では、各地域の特色を生かした多様なカリキュラムが開発され、地域に応じて変化を遂げながら体系的・探究的な取り組みが実践されています。また、市内の関係者はもとより、大学や専門機関を含めて、多様な関係者との協力・連携のもとに展開されていることも大きな特徴です。

情報共有や連携強化のために、ユネスコスクール研修会のほか、年に1回多様な関係者が一堂に会する気仙沼 ESD/RCE 円卓会議を開催し、最新の情報を共有しながら、あるべき姿を共に考えています。



2019気仙沼 ESD/RCE 円卓会議

## 東日本大震災の教訓を踏まえた気仙沼 ESD における防災教育

気仙沼市は、東北地方太平洋沖地震・津波により多数の尊い命が犠牲になりました。このことを教訓とし、ESD の視点に立って防災教育の見直しを図りました。「防災学習シート」には、そのことを踏まえた指導の具体例が詳しく記載され、指導に即応できる学習プログラムが提供されています。

防災教育を ESD の柱に据えている階上中学校では、震災の教訓を次の世代に語り継ぎ、命を守る行動ができる未来人を育成するために、気仙沼震災遺構伝承館での語り部活動を始めました。



階上中学校生徒による語り部

## 「海と生きる」気仙沼に関わるカリキュラム

気仙沼市の震災復興計画のキャッチフレーズは「海と生きる」です。これまでも、これからも気仙沼市は海の恵みを生かすとともに、その厳しさを受け入れていきます。このことを踏まえて、気仙沼市では、海に関する学びを再構築し、海洋教育としてのカリキュラムの構築にも力を入れています。市内15の幼稚園・小学校・中学校で海洋教育推進連絡会を組織し、情報を共有し、大学や専門機関の指導・助言と協力をいただきながら実践をすすめています。

また、気仙沼市は、「海洋プラスチックゴミ対策アクションプラン」を策定するなど、海洋環境保護に対して先進的な取り組みを始めました。気仙沼 ESD の中でも、この問題に関する学びを進め、市内の教職員や行政職員を対象とした研修会・や海岸のクリーン活動などの実践的な活動も行っています。



体験を遊びに生かしている幼稚園児

## 未来の気仙沼を描き、未来を創造する学びをととした人材育成

### ●『思考の習慣化』を図る ESD とさらなる深化・発展へ

経済のグローバル化や AI の発達、少子化など急激に変化する社会のなかで、これまでの実績を生かしながら、持続可能な社会づくりについて考えることの価値に触れる体験的で探究的な活動を展開し、未来の社会に生きる「未来人」として必要な教養である「思考の習慣化」を図ることを目指します。活動の安定化とアクティブ化を図りながら、市民参加を一層促進しながら、責任ある社会参画姿勢を身に付けていけるように深化・発展させていきたいと考えます。



これからの気仙沼 ESD とその可能性

### ●『地域社会を創造する力を養うプロジェクト』も実践しています。

高校で、中学校までの積み上げを土台とし、課題研究が行われています。この学習活動を、市行政や NPO 法人が主催する人材育成事業「ぬま大学」「ぬま塾」へと接続する地域創生を課題としたプロジェクトを展開しています。

# 大崎地域世界農業遺産推進協議会

〒989-6188 宮城県大崎市古川七日町1番1号  
大崎市産業経済部世界農業遺産推進課  
TEL:0229-23-2281  
E-mail:osaki-giahs@city.osaki.miyagi.jp



## 「守るために活かす」

## 世界農業遺産“大崎耕土”を活かした持続可能な地域づくり

世界農業遺産に認定された大崎耕土の農業や文化、豊かな生態系、水田や水路、居久根（いぐね）「屋敷林」が織りなす美しく、機能的な農村景観などを未来に継承・発展させるため、大崎地域世界農業遺産推進協議会と関係団体が一体となって保全と活用施策を推進し、大崎耕土の農業と暮らしを一層誇り高いものにしていきます。



FAO世界農業遺産国際フォーラムにて認定証を授与

## フィールドミュージアム構想

大崎耕土の様々な地域資源を博物館の展示物のように巡ったり、体験することなどにより、地域の方々の理解醸成と交流人口の拡大を目指すのが“フィールドミュージアム構想”です。現在、地域資源の見える化に向けて以下の取り組みを実施中です。

- ① フィールドミュージアムマップの作成
- ② 地域ストーリー・散策ルートの作成
- ③ 映像制作
- ④ 案内板の設置
- ⑤ フィールドミュージアム拠点整備
- ⑥ 食・農体験等の受入体制の確立
- ⑦ プロモーションと機運醸成
- ⑧ 居久根の保全・活用



大崎地域上流部の山間水路



居久根や水路が織りなす独特の農村景観



## 大崎地域の農産物等認証制度

“豊饒の大地「大崎耕土」世界農業遺産ブランド認証制度”は大崎耕土で生産された農産物や工芸品等の付加価値向上を図るものであり、認証制度は、まず米から開始し、2019年産米から世界農業遺産地域の認定米として販売しています。

本認証の特徴は、米の認証については、大崎市にある宮城県古川農業試験場で開発された品種であること、農薬化学肥料の使用が慣行比5割削減であること、さらに、生き物のモニタリングを実施することを必須要件としているのが特徴です。これだけの広域で生き物調査を行う認証制度は国内でも初めての取り組みになります。



生き物モニタリングの研修会



認証マーク

## 世界農業遺産の副読本

世界農業遺産大崎耕土を「守るために活か」していくために、先人の知恵と努力を次世代に伝え、誇るべき郷土の宝として継承していくための人材育成を行っていくことは不可欠です。このようなことを踏まえ、2020年度から1市4町の小学校3～6年生の全員に“世界農業遺産副読本”を配布し、学校教育の中で大崎の魅力を学ぶ機会を設け、地域への理解を深める取り組みを進めていくこととしています。

副読本の作成は、1市4町の教育委員会の参画の下で編集会議を構成し、地域事情にも精通した各教育委員会の教員が執筆作業を行いました。

このような学校での副読本を用いた学習をきっかけに、地域の方々と大崎地域の魅力を共有し、世界農業遺産認定地域に暮らすことへの誇りを醸成していきたいと考えています。



世界農業遺産副読本（案）

# 只見町教育委員会

〒968-0421 福島県南会津郡只見町大字只見字町下2591-30  
TEL:0241-82-5320  
E-mail:gakkou@town.tadami.lg.jp  
http://kir523528.kir.jp/



## ユネスコエコパークを軸にした 持続可能な交流人口づくり

只見町は、福島県の南西部に位置し新潟県と接しており、町の総面積747km<sup>2</sup>の約94%が山林で占められている中山間地域です。人口は、現在4,200人台で、高齢化率も46%に達しています。

只見町は、平成26年にユネスコエコパークに認定されました。ユネスコエコパークの理念である「人間と自然の共生」を推進しながら、持続可能な発展のできるまちづくりを目指しています。



只見町の位置

## 「只見学」のユネスコスクール実践カリキュラム

只見町にある3つの小学校と1つの中学校は、ユネスコスクールとして、地域理解学習である「只見学」を核としたESDに取り組んでいます。世界の平和を守る人材育成の土台として、ESDの実践を通して故郷を誇りに思い、故郷の豊かな存続に寄与することのできる児童・生徒の育成を目指しています。

また、平成29年から東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センターと提携し、海洋教育の視点を付加したESDを実践しています。地球規模の水の循環という広く大きな視点で只見を考え、「故郷を愛することは海や地球を守る」という意識を児童・生徒に育むことをねらいとしています。

さらに、子どもも大人も地域への理解を深め、地域の価値を再発見することができるよう『只見おもしろ学ガイドブック』を刊行し、全戸配付しました。平成27年からは、『只見おもしろ学ガイドブック』の一層の浸透を図るため、「只見おもしろ学検定」を実施しています。

各小中学校の主な学習活動は、只見小「ふるさと登山」、朝日小「海洋交流学习」、明和小「伝統芸能の伝承学習」、只見中「地域合同防災訓練」などです。



田子倉湖の大雪の秘密を探ろう  
(明和小5年生)



『只見おもしろ学ガイドブック』

## エコパークを活用した交流人口の育成プログラム

少子高齢化が進行し、只見町の小中学生の減少とともに、只見町唯一の高校である只見高校への入学者も減少してきました。このようなことから、只見町は只見高校の存続のために、平成14年から「山村教育留学制度」を始めました。県内外から只見高校への入学者を募集することで、入学生の安定的確保を目指しました。留学生は男子寮、女子寮に分かれて生活しています。山村教育留学生によって只見高校の存続と活性化、そして只見町の交流人口の拡大につながることを期待されています。



(左) 山村教育留学生の生徒たちが、12月24日クリスマスの夜、只見保育園の幼児の家庭にサンタの衣装を着て、クリスマスプレゼントを子供たちに届ける、町の催しに参加した。  
(右) 9月15日(日)、只見町内の只見、朝日、明和の3地区それぞれで運動会が開催され、山村教育留学生も只見地区の運動会に、「高校生」チームとして参加し、熱戦を繰り広げ3位入賞を果たした。

3小学校が各地域のつる細工保存会の方々に教えていただき、只見の伝統技術を学び地域の文化祭等で発信している。  
(写真は明和小6年生)

## 地域の資源を活用した持続可能な地域づくりプログラム

### ● 地域産業づくり～合同会社「ねっか」の設立

合同会社ねっかは平成28年7月、只見町の米農家5軒で設立され、米焼酎「ねっか」を製造・販売しています。「ねっか」は、“私たちの故郷がいつまでも故郷であり続けますように”という深い祈りを込めながら、全量が只見の米でつくられており、自称“日本一小さな蒸留所”から生まれた米焼酎です。

合同会社ねっかは、地産地消、地域貢献、将来への継承のための活動にも取り組み、田植え・稲刈り体験を実施したり、ゲストティーチャーとして地元の小学校の授業に参加したりしています。



米焼酎「ねっか」  
(合同会社ねっか HP より転載)

### ● ブナと生きる 雪と暮らす 「自然首都只見」伝承産品

「自然首都・只見」伝承産品は、この地域の自然環境、生物多様性の保護・保全とそれらを拠り所とした地域の伝統産業や文化の継承・発展、地場産業の育成のために町が認定する制度です。

只見の雪深い大自然の恵みを受けた天然資源や農産物を原材料とし、伝統的な技術でつくられてきた、つる細工や農産物加工品等が厳正な審査を経て「自然首都・只見」伝承産品として認定・販売されています。



伝承産品を紹介しているパンフレット  
(只見町役場 地域創生課)



地球市民による地域資源を活用した  
SDGs・ESDカリキュラム開発

---

**平泉町教育委員会**

# 過去に学び、今を見つめ、 未来を考える「平泉学」

## (1) はじめに

平泉町は岩手県南部に位置し、西は奥羽山脈、東は北上山地に囲まれた盆地で、中央を流れる北上川周囲に耕地が開けている町です。人口7700人の小さな町で、保育所・幼稚園児215名、小学校2校に児童348人、中学校1校に生徒200人が在籍しています。平安時代末期、前九年の役・後三年の役において悲惨な体験をした初代藤原清衡が、争いのない清らかな国土、すなわち浄土思想をもとにまちづくり・国づくりを行い、平泉は、周辺地域で豊富に産出された金などを利用し、中尊寺金色堂をはじめとする黄金文化を花開かせ、みちのくの都として栄華を誇ったと伝えられています。

2011年3月11日に発災した東日本大震災の3ヶ月後、中尊寺や毛越寺などを含む平泉の文化遺産がユネスコの世界文化遺産に登録され、豊かな自然と歴史がありなす浄土のまち平泉は東北に希望の光を届け、現在は年間200万人余りの観光客が訪れております。

「やすらぎと文化をおりなす千年のまちづくり」を掲げ、未来を担う子どもたちの「幼保小中の系統的な平泉学学習」を「過去に学び、今を見つめ、未来を考える学習」として取り組んできましたが、今後ますます少子高齢化・人口減少が進むと予測される平泉は、持続可能なまちづくりのための「全世代型平泉学」へ発展させていこうとしています。

## (2) 幼保小中の系統的な「平泉学学習」の実践による持続可能なまちづくりのための教育

### 1 あゆみ

2007年度に生活科、総合的な学習の時間での「平泉学習・地域学習」が、学校・学年ごとの実践が開始されました。当時は、学校ごとの計画による取り組みでした。2009年度になって、奈良市の呼びかけで設立された「世界遺産学習連絡協議会」に参加し、全国の世界遺産学習に学ぶ機会を得ました。そして、2011年度、岩手県生活科・総合的な学習教育研究会一関大会の会場地となり、「郷土平泉学」の目標・カリキュラムを策定し、公開研究会において実践発表を行い、参会者から多くの意見・批評をいただきました。2013年度からは、世界遺産学習連絡協議会主催の「世界遺産学習全国サミット」に児童・小中教員を派遣し実践発表を行うとともに、全国各地の世界遺産学習・ふるさと学習の取り組みを学ぶことができました。そして、2016年度には世界遺産登録5周年を記念して「世界遺産学習全国サミット in 平泉」を開催し全国の実践交流を図ることができました。

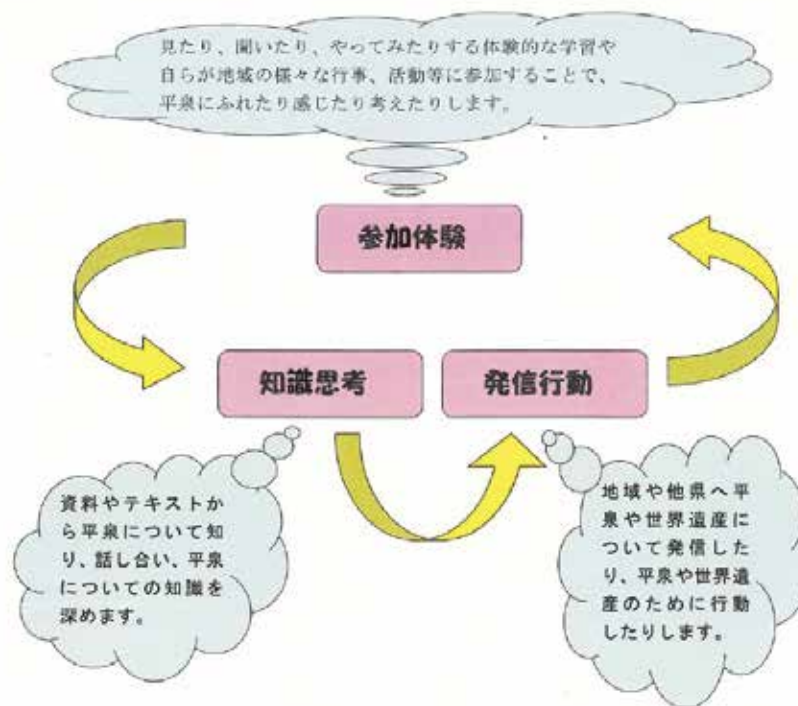
### 2 目的と体系構想

#### 【平泉学の目的】

- ◆ 郷土に伝わる歴史や伝統文化、風土、風習など、地域の宝・財産を次世代に受け継いでいく
- ◆ 平泉学を通じて、地域課題の解決に向けた取り組みと持続可能な地域社会の実現に向けて取り組む
- ◆ 世界遺産「平泉」の優れた史跡や平泉を創り上げた先人の思いを学び、平泉の価値・魅力を国内外に発信する

## 【体系構想】

実践を進める中で、幼保小中それぞれ単独に進めていた実践をそれぞれの発達段階に応じて整理し体系化する構想をまとめてきました。学習の進め方については、その学習プロセスを「参加体験（見たり、聴いたり、行事などに参加すること）→知識思考（資料などから平泉を知り、話し合い、知識を深めること）→発信行動（他の地域で平泉を発信し行動すること）」としてサイクル的に進めています。



平泉学サイクル図

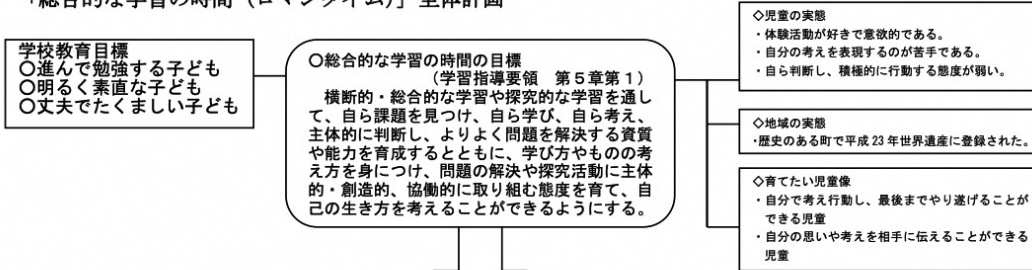
## 系統化と各学年列テーマ

学習活動	学年	学習テーマ
ふれる ・感じる	幼稚園 ・低学年	世界遺産の町・地域を見て歩こう お散歩・町歩き・町探検
ふれる ・知る	中学年	世界遺産の町・地域にふれ・知ろう 世界遺産めぐり・伝統行事・祭り調べ・地域活動参加、地域じまん学習
知る ・考える	高学年	平泉の歴史を知ろう・考えよう 平泉の歴史・歴史的建造物調べ、地域の産業調べ、先人の平和への願い・平泉の価値を考える リーフレット作成、環境・災害調査
知る	中学1年	「過去を知る」平泉の歴史・文化を学ぶ 平泉遠足、平泉学テキスト学習、座禅・写経体験、平泉学検定
見つめる	2年	「今を見つめる」世界遺産になった平泉を見つめる 大文字送り火への参画、職場体験研修、北上川遊水地事業と防災学習、平泉アピール準備
広げる	3年	「未来に広げる」日本の平泉から世界の平泉へ 修学旅行での平泉アピール（復興と平和の発信）、夢明かり製作、平泉ガイド体験

# 3 各小中学校の実践

## ● 平泉町立平泉小学校

### 「総合的な学習の時間（ロマンタイム）」全体計画



**○本校における総合的な学習の時間の目標**

地域の人々の暮らしや伝統・文化、生き方に関する探究的な活動を通して、自ら学ぶ力を育てるとともに、自己の生き方を考えることができるようにする。

育てたい資質・能力		学習内容	
		3・4年生	5・6年生
学ぶ力	<ul style="list-style-type: none"> <li>○体験したり調べたりして気付いたことや疑問に思ったことをもとに課題を設定する。</li> <li>○目的に合わせて情報を収集し、比較したり関連付けたりしながら考える。</li> <li>○目的や相手を考えながら、伝えたいことを表現する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分の興味・関心や、体験したり調べたりして考えたことをもとに課題を設定し、見直しを持って学習の計画を立てる。</li> <li>○対象や目的を考えて情報を収集し、整理・分析して考える。</li> <li>○目的や相手に合わせ、方法や工夫を考えながら、伝えたいことを表現する。</li> </ul>	<p><b>地域</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域や人とのかかわり、ふれあい</li> <li>・地域の特徴の理解</li> <li>・地域に生きるよさの実感</li> <li>・地域に生きる一員としての自覚 など</li> </ul> <p><b>福祉</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・豊かな人権感覚</li> <li>・高齢者とのかかわり</li> <li>・障害のある人への理解 など</li> </ul> <p><b>伝統・文化</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の伝統や文化の特徴</li> <li>・継承に力を注ぐ人々の思い</li> <li>・伝統や文化を守り、受け継ごうとする活動や取り組み など</li> </ul> <p><b>環境</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・身近な自然環境とそこに起きている環境問題</li> <li>・環境を守るために活動に取り組んでいる人々 など</li> </ul> <p><b>食育</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・食生活への関心</li> <li>・米に関わる食文化 など</li> </ul> <p><b>国際理解</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域への愛着や誇り</li> <li>・世界の様々な国の歴史と文化の理解 など</li> </ul> <p><b>キャリア</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな職業と自分たちの生活との関わり</li> <li>・労働の喜び・苦勞など、労働の意義 など</li> </ul> <p><b>情報</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・目的に応じた情報の選択と収集</li> <li>・収集・選択した情報の活用</li> <li>・責任ある情報の発信 など</li> </ul>
かかわる力	<ul style="list-style-type: none"> <li>○地域に関心を持ち、目的を持って地域とかかわる。</li> <li>○相手の立場や気持ちを考え、協力して活動する。</li> <li>○活動に主体的・協働的に取り組むとともに、お互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○対象の価値を認めながら、地域の一員として、くりかえし地域にかかわる</li> <li>○相手の考えや気持ちを共感的に受け止めながら、協力して活動する。</li> <li>○活動に主体的・協働的に取り組むとともに、お互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画する。</li> </ul>	
生かす力	<ul style="list-style-type: none"> <li>○対象を見つめ、自分の思いや考えを持つ。</li> <li>○自分の考えを学習や生活に生かし、地域に愛着を持ってかわかろうとする気持ちを持つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○対象を見つめ直し、自分の思いや考えを広げながら、主体的に活動しようとする。</li> <li>○学んだことを生活や生き方に生かし、自分の生活を豊かにしようとする。</li> </ul>	

※「情報」は、他の領域の学習事項との関連を図りながら、学習活動を行う。

学 年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
学習活動内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>○発見 たんけん 平泉</li> <li>・史跡巡り・じまんさがし</li> <li>・味自慢さがし</li> <li>・平泉のじまんを広げる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○笑顔広がれ 平泉</li> <li>・町のおまつり調べ</li> <li>・お年寄りとの交流</li> <li>・自分たちの活動を広げる。</li> <li>○音楽で町に元気を届ける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○知ろう！創ろう！平泉の産業</li> <li>・平泉の産業調べ（特徴や問題点）</li> <li>・問題点の解決や地域活性について考える。</li> <li>・自分達との関わりを考え広げる。</li> <li>○音楽で町に元気を届ける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○見つめよう未来の私と平泉</li> <li>・古都ふるさと平泉を見つめ直す。</li> <li>・地域貢献</li> </ul>
指導方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・探究的な学習の連続性を意識した学び合いの充実</li> <li>・諸感覚を駆使した体験活動の重視</li> <li>・協働的な学習活動の充実</li> <li>・各教科・領域との関連を図った指導の工夫</li> </ul>			
指導体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究部を中心とした校内の連絡調整と支援体制の確立</li> <li>・情報収集の集積と活用</li> <li>・地域の人材の効果的な活用</li> </ul>			
学習の評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人内評価の重視</li> <li>・ファイリングした資料や作品によるポートフォリオ評価</li> </ul>			

#### ◆教科との関連

教科で身につけた知識や能力を総合で磨き生かすとともに、総合でつけた力を教科で生かす。

国 語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・談んだり聞いたりしたことを整理して文章に表すことができる。</li> <li>・相手、目的、場面などに応じ、適切に話したり書いたりすることができる。</li> </ul>
社 会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会的現象を的確に観察・調査することができる。</li> <li>・地図や統計などの各種の資料を効果的に活用することができる。</li> </ul>
算 数	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉、数、図、表グラフなどを用いて、考えたり説明したりすることができる。</li> <li>・見直しを持って、筋道を立てて考えたり表現したりすることができる。</li> </ul>
理 科	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童自ら問題を見だし、見直しを持って観察や実験などをすることができる。</li> <li>・観察実験の結果を整理し、わかりやすくまとめることができる。</li> </ul>
生 活	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身近な人々・社会・自然とかかわれる楽しさがわかり、進んで活動することができる。</li> <li>・気付いたことを言葉、絵、動作、劇化などの方法により表現し、考えることができる。</li> </ul>
図 工	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感じたこと・想像したこと・見たことから、表現したいことを見つけて表すことができる。</li> </ul>
家 庭	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の生活と身近な環境とのかかわりについて考えることができる。</li> </ul>
体 育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分やグループの課題解決に向けて、練習の仕方や発表の仕方を工夫することができる。</li> </ul>
道 徳	<ul style="list-style-type: none"> <li>・礼儀・思いやり・感謝・責任感・勤労・社会奉仕・郷土愛</li> </ul>
特 活	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人間関係を築く力、自治能力、社会に参画する態度を育成する。</li> <li>・自他よさや役割を認め合う関係を構築する力を育成する。</li> </ul>
外国語教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・異なる言語や文化を理解しようとする態度を育成する。</li> <li>・積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。</li> </ul>

#### ◆地域との連携

- 地域の文化的資源の活用
- 地域の施設・機関との連携・活用
- 地域の人材活用

#### ◆家庭と連携した体制作り

- 支援ボランティア
- 家庭への広報活動



● 平泉町立長島小学校



# ● 平泉町立平泉中学校

## 総合的な学習の時間 全体計画

平泉町立平泉中学校

<b>学習指導要領 第1の目標</b> (3) 探求的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。		<b>学校教育目標</b> 人間の美しい心を伸ばし希望をもって生活をきりひらいていく生徒 一、自立 二、連帯 三、開拓		<b>各教科等で育成する資質・能力</b> 各教科 ○よく聞き、考える力 ○発言・発表のスキル ○探究的に取り組む意欲・姿勢・態度 ○協働して学習に取り組む姿勢・態度 ○知識・技能の定着 ○学習の成就感 道徳教育 ○人を大切にすること ○郷土に愛着を持ち、貢献しようとする態度 ○身に付けたい道徳的な価値項目 「自他の尊重」「自主・自律」「感謝・思いやり」「礼儀」「役割と責任」「向上心」「自然への畏敬の意」 特別活動 ○地域に貢献できる活動 ○自他共に高め合える活動 ○協働的な学習の基盤となる人間関係の構築 ○互いを認め、助け合いながら物事に取り組む姿勢 地域との連携 ○地域活動に参画する意欲・態度 ○地域で活躍する人から学ぶ姿勢 ○地域の一端としての意識を持つための地域住民との交流・奉仕活動への取組	
<b>「総合的な学習の時間」の目標</b> 1. 自ら課題を見つけ、考え、解決する力を身につけさせる。(課題設定力・問題解決力) 2. 協働的に取り組む姿勢と態度を養い、学び方を身につけさせる。(協働的な学習・表現力) 3. 自らの生き方について考え、前向きに実践する姿勢と態度を育成する。(主体的な生き方) 4. 自分の住む地域を見つめ、地域に根差して生きようとする態度を培う。(地域参画の態度)					
<b>「総合的な学習の時間」の内容</b>					
<b>探求課題</b>		<b>育成する具体的な資質・能力</b>		<b>「総合的な学習の時間」の指導</b>	
学年	① 郷土・平泉学	② 生き方を考える	相互に関連付けられ、生きて働く知識・技能	進め方	・グループ活動を基本とした学習計画 ・具体的な学習内容・方向性を学年担当で企画・立案 ・ガイダンスによる生徒への意識化 ・フィールドワークの実施、目的に見合った調査場所・人材の設定 ・自己の生き方を意識した振り返りの設定
1学年	<b>【過去を知る】</b> 平泉の歴史と文化について文献や体験をもとにして調べ、知り得たことを発表できる。 平泉学検定、わくわく平泉学(体験学習) 平泉歴史探検隊 など	職業調べを行い、自己の特性と関心と関連させながら、職業観を養い、働くことの意義をつかむ。	・各教科の学習などから疑問や問題点を見つける ・各教科等で学んだ知識や技能を生かす ・調べたことが自分のものになっている ・学ぶことが自分自身の生活態度で生かす ・新しい疑問や課題を見出す	進め方 ・3年間を見据えた年間指導計画の立案 ・学級担任を主体とした学年でのIT指導または全校体制での取組 ・全職員における学習活動の情報共有・共通理解 ・資料や調査先、外部人材などの開拓の推進、次年度への引継ぎ	
2学年	<b>【今を見つめる】</b> 地域のさまざまな活動や取組を学び、その課題や良さを見出すことを通じて、地域理解を深める。 平泉の防災、地域調べ、平泉紹介 など	自己の特性と関心をもとに職業体験に取り組み、実践を通して働くことの意義を理解するとともに、適切な職業観を身に付ける。	思考力・判断力・表現力 ・課題解決や探求の手順を考え、見通しを持って取り組む ・友達と意見で話し合い、考えを広めたり深めたりする ・伝える相手を意識してまとめたり表現したりする ・自信を持って望みと成果を伝える	重要点 ・適度な困難性を有する課題設定 ・フィールドワークによる情報収集(人との関わり) ・教科等で習得した知識・技能の有効活用 ・マナー等の指導、情報収集・蓄積・分析などの仕方の指導	
3学年	<b>【未来に広げる】</b> 地域の文化活動に関わり、平泉を広く紹介する活動を通して、地域を担う意欲と姿勢を身に付ける。 平泉アピール活動、地域活動に参画する平泉ガイド学習・体験 など	地域で活躍・活動する人から学ぶことを通じて、地域に誇りを持ち、地域文化を担い、地域を発展させようとする心情と態度を身に付ける。	自分自身との関わり ・人とのつながりの大切さを理解する ・コミュニケーション能力を高める ・他者や地域・社会から学ぶ姿勢を持つ ・実社会での自分を思いながら、自己実現に向けて生活する ・地域社会に貢献し、携わっていく姿勢を持つ	指導体制 ・「総合的な学習の時間」の目標を踏まえた生徒個々の評価 ・観点を踏まえた評価標準の設定 ・指導と評価の一体化 ・制作物、ワークシート等を活用したポートフォリオによる評価 ・生徒の活動の様子・感想、保護者や地域からの声などの蓄積 ・アンケートによる活動前後の生徒の資質把握 ・各種調査による生徒の資質・能力の年長把握	
<b>教科等を越えた全ての学習の基盤となる資質・能力</b>					
<b>情報活用能力</b> ・情報の収集(調査計画、フィールドワーク、参考文献調査等) ・情報の整理(情報の取捨選択、分類、グラフ化、マッピング等) ・情報の共有(自他の情報の比較・分析、意見交流、発表等) ・情報の発信(発表方法、まとめ方、相手を意識した伝達等) ・情報の活用(振り返り、新たな課題の発見、FDCAサイクル等)		<b>言語能力</b> ・自己の考えや思いを相手に伝える姿勢・態度 ・自他の考えの比較・分類・関連付け・整理 ・協働して問題を解決する意欲と姿勢 ・収集した情報の分析、まとめ、発表、活用 ・相手を意識した声量、態度、姿勢、言葉遣い ・適切な表現(プレゼンテーションの工夫) ・文章、画像、グラフなどの効果的な使用		<b>プログラミング・考えるための技法</b> ・調べ学習の計画・調査・調査事項の整理と分析・まとめと発信の流れの明確化 ・比較、分類、関連付けなどの方法の習得と活用 ・適切な調査方法の選択(インタビュー、文献調査、施設訪問、体験活動など) ・アポイントメントの取り方、対応の仕方 ・取組事項をもとにした思考、分析、表現 ・課題の整理・明確化と解決方法の検討 ・外部講師の活用	

## 新たな平泉学への展開

系統立てた平泉学学習を続ける中で、これまでの世界遺産学習から新たな平泉学への展開を次のような視点で考えました。

- ① より地域に根ざした内容への見直し
- ② 先人の思いや願いにふれる機会の増加
- ③ 地域ぐるみの学習への拡大

藤原三代の100年だけが平泉ではありません。清衡、基衡、秀衡、泰衡だけがクローズアップされがちですが、狭い町内ではありますが地域に生きた人々のあかしであるとか、今の時代まで継承されてきた文化や伝統に目をむけること、また、学習を点から線へ、そして面へと広げていかなければならないと考えます。つまり、幼保小中の系統化をさらにすすめること、そして、地域や他市町村、他県との学びあいへと発展させていくことだと考えてこのあとでふれる平泉を出て行く交流と情報発信活動へ展開しています。

### (3) 地域や生涯学習の場で広げる平泉学

#### 1 子どもを中心にして取り組む地域学習

子どもたちが学校で学ぶ平泉学を地域ぐるみの学習へと拡大させるため、2014年度から「地域学習」が行われています。自分たちが住む地域の歴史や文化などを子どもに教え伝える。それは子どもだけでなく、大人も地域のよさを再認識する機会につながっています。町内21行政区のPTA子ども会が主体となり、地域の歴史・伝統行事・郷土料理・昔遊び・伝統文化・暮らしを守る防災などをテーマに地域住民が集う絶好の機会ともなっています。郷土への愛着と誇りを次の世代に伝える地域学習をきっかけに、世代間交流が活発となり、地域コミュニティの再生にもつながっています。



地域学習「20区遊水地・長島水門現地学習」

平成30年度国庫補助事業「地域学校協働活動推進事業」

#### 「地域学習（平泉学習）」実施状況一覧

実践区	行政区	実施日	時間	内容	講師	参加者	備考
平泉小	1区	12月16日(日)	9:00～11:00	地域風習「縄ない」体験	佐々木正治	子7、親7、地域2	
	2区	8月5日(日)	9:30～11:30	座禅体験・中尊寺境内の自然観察会	阿部慶元	子17、親11、地域5	
	3区	8月18日(土)	9:00～11:00	戸内河内の秋葉神社について学ぼう	菅原悦郎	子8、親8、地域1	
	4区	7月29日(日)	14:00～15:30	昔ながらの遊びを体験しよう 紙玉鉄砲・流しそめん	高橋誠	子7、親8、地域3	
	4区・5区	1月6日(日)	9:00～11:00	きんこならし	阿部力	子10、親15、地域2	
	6区・7区	12月16日(日)	9:00～12:00	餅つき、餅花飾り体験と由来について	小山哲子	子45、親25、地域	
	8区	9月8日(土)	10:00～12:30	地域のお年寄りと交流を図る	ケアセンター いこい	子19、親15、地域20	
	9区	12月16日(日)	9:30～11:30	平泉の世界遺産、及び佐野地区周辺の歴史等	毛越寺 藤里術生	子15、親10、地域5	
	10区	12月25日(火) ～1月6日(日)	18:30～20:00	紙園獅子舞の伝承	千葉正	子7、親、地域40	
	11区	8月5日(日)	9:00～11:00	座禅体験・歴史学習	毛越寺 高倉弘明	子19、親10	
	12区	10月7日(日)	10:00～12:00	稲刈り体験	千葉孝	子11、親8、地域3	
	13区	12月23日(日)	9:00～12:00	しめ縄づくり	地域住民	子16、親18、地域30	
	長島小	14区	12月23日(日)	9:30～10:30	しめ縄づくり	地域住民	子15、親13、地域30
15区		1月27日(日)	10:00～12:00	昔遊び体験	橋階和雄	子14、親9	
16区		12月23日(日)	10:00～12:00	八斗づくり体験	山平多美子	子14、親10、地域4	
17区		1月13日(日)	12:30～14:30	小島神社の歴史について	畠山清一	子8、親7、地域2	
18区		1月12日(土)	10:00～13:30	きんこならし	18区悠友会	子7、親3、地域16	
19区		8月5日(日)	9:00～11:00	小島神社の歴史について	畠山清一	子4、親2、地域2	
20区		12月23日(日)	9:00～12:00	しめ縄づくりを学ぼう	丸山正之	子6、親4、地域10	
21区		12月23日(月)	9:00～12:00	しめ縄づくり	石川恵規	子11、親8、地域20	

子261人、親198人、地域188人、合計647人

2018年度の各行政区の地域学習一覧（地域学習取り組み写真）

## 2 地域の価値を共有する「平泉ウォーキング」

歴史や文化、自然環境といった地域素材を有効に活用し、それらの資産が持つ価値を学ぶ「平泉ウォーキング」は、「歴史編」・「山野草編」として健康づくりも兼ねながら行われている毎年好評の公民館企画です。

歴史編では、「平泉といえば中尊寺や毛越寺といった世界文化遺産の構成資産だけに目を奪われがちですが、町内にはまだまだ隠れた歴史ある遺跡がたくさんある」と話す平泉文化遺産センター館長の案内で、ふだん見逃されがちな遺産や土地の歴史を学んでいます。訪れる場所は、善阿弥屋敷墓地や貴船明神社など歴史的な価値があり地元ではよく知られている史跡などですが、世間一般には知られていないスポットばかりです。館長は、「遺跡を今後も守っていくためには、情報を共有し、その価値を知る人が増えていくことが重要」と、多くの町民参加を歓迎しています。参加者からは、「生まれも育ちも平泉だが、こんな場所があるなんて知らなかった」「まだまだ町内には面白い場所があることに気づかされた」といった声が聞かれました。(歴史編・山野草編学習風景写真)

一方、山野草編は、以前ウォーキング教室が実施された際に道端の植物に興味を持つ方々が多かったことから公民館が主催して新たにスタートしました。町内在住の県環境アドバイザーの案内で道中の植物に注目して散策し、アドバイザーから「町内には珍しい動植物は少ないが、昔から農林業が盛んだったため、里山や農地周辺の美しい自然が形成されている」という平泉の自然の魅力を聞き、緑豊かな自然や景観を眺めて歩いています。参加者からは「知らない土地でも教えてもらいながら歩くと、より親しみが持てる」「地元を知るいい機会になった」という声も聞かれました。

「地域について学びたい」という思いは子どもだけでなく大人にもあります。平泉は、歴史や文化、自然など地域素材に恵まれています。それらを活用しながら、学ぶことへの意欲を高め、だれもが気軽に社会参加できる環境を構築していくことで、活力ある地域づくりにもつながっていくはずですよ。

## 3 行政・地域と学校との連携の取り組みプログラム「平泉町教育振興運動活動として」

### ● 郷土芸能体験講座

平泉町教育振興運動の取り組みの一つとして、教育委員会が企画して2015年度から中学生を対象に郷土芸能体験講座「達谷窟毘沙門神楽」を開設しました。かつては中学校運動会で全校生によって舞われていましたが、学校事情等で行われなくなっていました。地域で継承されている郷土芸能を若い世代に学ばせたいという思いから「地域型土曜学習」として希望者を募り、月1回のペースで練習を重ね、今では学校文化祭、町民のつどい、神楽大会等の行事や祭りで演じています。今では小学校高学年の児童にまでメンバーが広がり、女性中心の神楽の会の皆さんの温かい指導と支援を受けながら舞いに磨きをかけています。高校進に進学した先輩もサポートするまでになっています。



## ● わくわく平泉学スクール

小中学校において、地元の講師による「平泉学講座」が開催されています。各校の要請によって、下表の内容で行われています。

校	講座内容	受講者（学年）	指導者
平泉小	写経体験・座禅体験、調べ学習（祭りなど）	3回 のべ71名	町内僧侶・神官・農家・商工業者
長島小	歴史講話（現地見学）、大文字計測	2回 のべ44名	町内僧侶・文化遺産センター館長・教育委員会職員
平泉中	座禅・写経体験、発掘・拓本・土器洗浄、ガイド学習	各学年ごと のべ192名	町内僧侶・文化遺産センター職員・町内ガイドの会会員

## (4) 持続可能な地域社会づくりを目指す平泉学

### 1 世界遺産でつながる他地域との交流と情報発信

平成25年度から小学5・6年生リーダーによる「平泉を出て平泉を見つめる」歴訪団活動を行ってきました。下表が年度ごとの活動のあゆみ一覧です。

#### ジュニア平泉文化歴訪団・黄金平泉情報発信プロジェクトのあゆみ

年	訪問地	研修場所	交流校等
25年度	福島県 いわき市 白河市 国見町 宮城県 角田市	白水阿弥陀堂 白河の関 阿津加志山防塁 高蔵寺	国見町内小学校
26年度	山形県 酒田市 鶴岡市 最上町 戸沢村	酒田総合文化センター 泉流寺・急鎧屋・山居倉庫 鼠ヶ関 邦人の家 最上川千人堂	酒田36人衆子孫の方
27年度	青森県五所川原市 秋田県 大館市 横手市	十三湖市浦博物館 錦神社・西木戸神社 増田町内蔵・後三年合戦金沢資料館・大鳥山遺跡	横手市大雄小
28年度	岩手県 釜石市 宮古市 田野畑村 久慈市 一戸町	鉄の博物館・橋野高炉跡 田老観光ホテル津波遺構 田野畑ジオパーク・民族資料館 モグランピア水族館 御所野遺跡	御所野愛護少年団
29年度	栃木県 日光市 福島県 白河市 国見町	東照宮・輪王寺・中禅寺湖 白河の関・県文化財センターまほろん 阿津加志山防塁 義経まつり参加（9.23）	国見ジュニア応援団
30年度	和歌山県田辺市 奈良県 奈良市 福島県 国見町	鬮鷄神社・若宮神社・和歌山県遺産センター・本宮大社・熊野古道・南方熊楠記念館 東大寺・興福寺 義経まつり参加（9.23）	田辺市本宮小・三里小 国見ジュニア応援団
R1年度	広島県廿日市市 広島市 呉市 福島県 国見町	安芸の宮島（厳島神社・五重塔・豊国神社・大聖院・町家どおり） 原爆ドーム・平和公園（子どもの像等慰霊碑・平和記念資料館） 大和ミュージアム 義経まつり参加（9.23）	廿日市市 宮島学園小学校 国見ジュニア応援団

2013年度から5年間は平泉につながる東北各地を5年かけて巡り、地元小学生との交流もさせていただきました。

2018年度は、弁慶が取り持つ縁で友好関係にある和歌山県田辺市を訪問し、子ども語り部活動を行っている本宮地区小学校児童のガイドに学びながら世界遺産熊野古道を歩き、交流会で平泉学学習を発信してきました。

### 『黄金平泉情報発信プロジェクト』日程表

※日程については、行程などの関係により変更となる場合があります。

#### 【8月1日（水）】

6:20 平泉町役場集合・受付  
 6:35 出発式  
 6:50 徒歩移動（役場 → 平泉駅）  
 7:14 平泉駅 発  
       在来線・新幹線乗継  
  
       車内で昼食  
  
 15:29 紀伊田辺駅 着  
 15:50 ●見学「南方熊楠顕彰館」  
 16:30 南方熊楠顕彰館 発  
 17:30 宿泊施設 着  
 18:30 夕食  
 19:30 ●班別学習  
 20:30 就寝準備  
 21:30 就寝

#### 【8月2日（木）】

6:30 起床・準備  
 7:00 朝食  
 8:00 宿 出発  
 9:30 ●見学「秀衡桜」  
 10:00 移動  
 10:30 ●見学「世界遺産センター」  
 12:00 昼食  
 13:00 ●学習「熊野古道」歩き  
 15:00 休憩  
 15:30 ●児童交流  
 16:30 移動  
 18:00 宿泊施設 着  
 18:30 夕食  
 19:30 ●班別学習  
 20:30 就寝準備  
 21:30 就寝

#### 【8月3日（金）】

6:30 起床・準備  
 7:15 朝食  
 8:30 宿 出発  
 9:00 ●見学「武蔵坊弁慶縁の地巡り」  
 11:00 昼食  
 11:30 和歌山県田辺市 発  
 14:30 奈良県奈良市 着  
       ●見学「東大寺ほか」  
 17:00 移動  
 17:30 宿泊施設 着  
 18:30 夕食  
 19:30 ●班別学習  
 20:30 就寝準備  
 21:30 就寝

#### 【8月4日（土）】

6:30 起床・準備  
 7:00 朝食  
 8:00 宿 出発  
 8:46 奈良駅 発  
       在来線・新幹線乗継  
  
       車内で昼食  
  
 15:53 平泉駅 着  
       移動  
 16:10 平泉町役場 着  
       到着式  
 16:30 解散

## 【メンバー】長島小学校 6年 山平 葉奈 (やまだいら はな)

私がこの研修で思い出に残ったことは、三つあります。一つ目は、二日目に本宮小学校と三里小学校の5・6年生と熊野古道を歩いたことです。上り坂はきつかったけれど、本宮小学校と三里小学校の5・6年生が分かりやすく説明してくれたり一緒に話をしたりして、きついのが忘れそうになりました。語り部のみなさんは、大きい声で分かりやすい説明をしてくれたのでたくさんのことを学ぶことができました。頂上から見た景色はすごいきれいで今でも、あの絶景は忘れていません。大とりいを見た時は、すごい大きくてはく力があっておどろきました。私は和歌山県のみなさんに私たちが準備したのを発表する時に「前を向いて、ゆっくり話そう!」と思っていました。人がたくさんいてきん張したけれども前を向いて、ゆっくり話すことができました。お別れ会の時に渡したキャンドルも、みんなよろこんでくれたのでうれしかったです。

二つ目は、三日目に奈良県の東大寺に行ったことです。教科書にのっていて実際に行けると思うとうれしくてワクワクしていました。阿形や吽形などは、足もすごい上手つくられていてすごいと思いました。奈良の大仏は、思ったよりも大きくておどろきました。年に何回か門のまどが開き、大仏の顔が門の外から見えるのがあると聞いてみたいなあと思いました。昔は七重のとうもあつた聞いて、五重のとうの約2倍と言っていたので、とっても大きかったんだなあと思いました。いつか七重のとうも見てみたいです。しかは、育てているのだと思っていたので育ててないときいておどろきました。私がやりたかった大仏の鼻穴の大きさの柱をくぐることができ、とても良い記念になりました。興ふく寺では、中の大仏を見たり五重のとうを見たりしました。こんなにたくさんの大仏を見たのはあまりなかったのですごくいいと思いました。

三つ目は、みんなと仲が良かったことです。事前研修では、あまり話さなかった子ともだんだん仲良くなりました。平泉小学校の子は初めて会った子もいたけれど、4日目には平泉小学校の子ともたくさん話していました。長島小学校のみんなとは、前よりも支えあつたりたくさん話したりしてもっと仲良くなれました。新幹線では、みんなと話すのに真けんになって他のお客さんのめいわくになってしまうことも何度かありました。また、電車でおじいさんに「席、いいですよ。」と進んでいったりすることもできました。

また、初めのころは「5分前行動」は守れない時もあつたけれどだんだん守れるようになってきて今は、習慣になっています。

他にも「近露王子」や「南方熊楠記念館」にも行ってたくさん学んできました。秀衡桜は今が5代目で6代目の枝も成長していて、どんどん続いていくんだなあと思いました。記念館では、熊楠があまり成績がよくなかったというのがおどろきました。なのに、自分で葉っぱやきのこなどを観察して図かんなども作ったりしていてすごいと思いました。展望台から見えた海は、とてもきれいでした。

この研修で私は、たくさんのことを学びました。「5分前行動」や「電車でのルール」、「協力」などです。

夏休み、一番の思い出です。研修はこれで終わってしまいましたが、「5分前」行動などは、これからの生活で生かせると思うので生かしていきたいと思います。学校でも研修のことを話したいです。

感想文集より

また2019年度には、同じく世界文化遺産として登録されている安芸の宮島と広島原爆ドームを中心に中世の歴史と被爆地に学ぶ平和について見聞を広め、宮島学園児童との互いの発信交流を行っています。

今後も、世界遺産つながり・平泉つながりの発信・交流学习を継続していきたいと考えています。

## 2 全世代型平泉学への発展を目指して

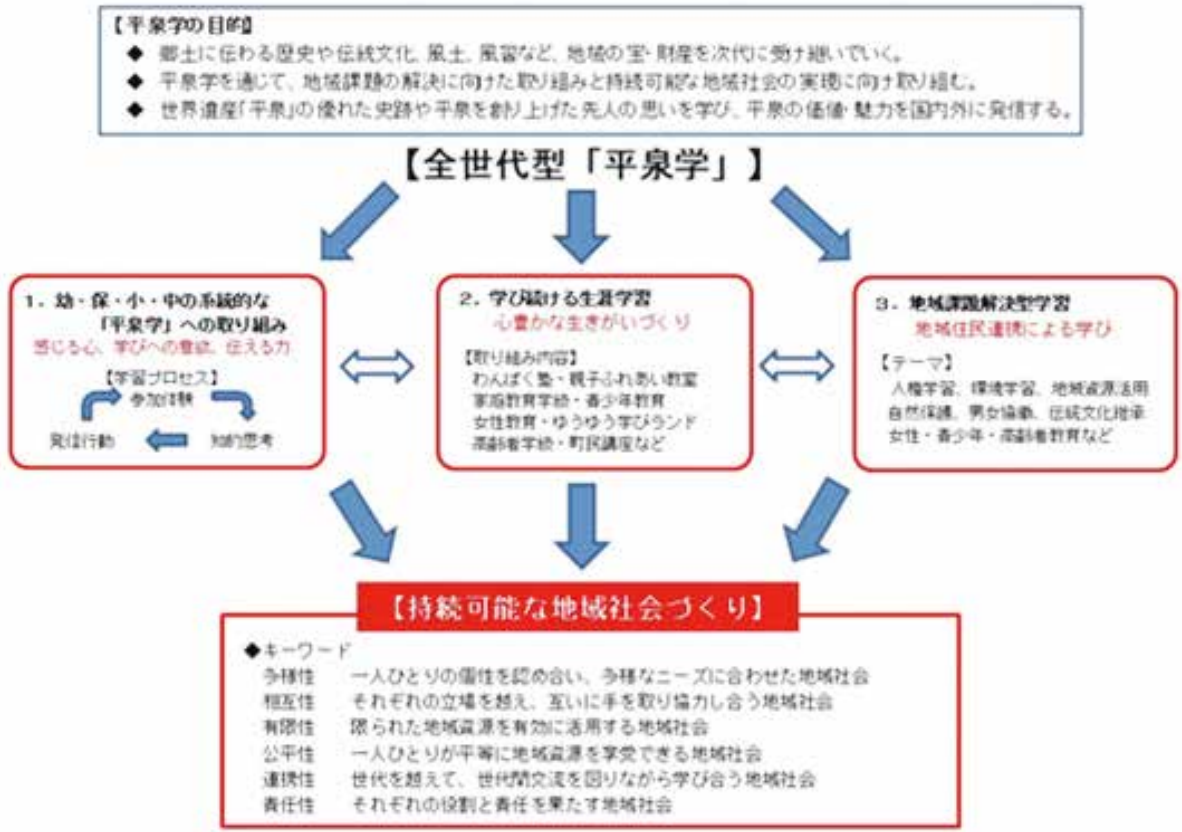
世界文化遺産登録を果たし、ここ10年、学校教育において、平泉への愛着と誇りを図るため、平泉の価値を学ぶ「幼保小中の系統的な平泉学学習」を続けてきました。その内容は発達段階に応じて、先人の願いに触れ、世界遺産の価値や地域に残る遺産や文化に学ぶことから、今を生きる人々の努力を知り、明日を生きる自分たちの思いも含めて全国に発信する学習といえます。この学習は、伝統や文化に立脚した広い視野を持ち、志高く未来を創りだしていくために必要な資質・能力を確実に育む教育の実現につながるものです。

少子高齢化、人口減少社会の危機が叫ばれている現代において、町の教育大綱に掲げる「一人ひとりが輝き、幸せを実感できるまちの実現」を目指す平泉においては、これまで学校教育中心に取り組まれてきた平泉学学習の成果をふまえて、より広範な町民の方々が積極的に関わる「過去に学び、今を見つめ、未来を考える全世代型平泉学」へと発展させたいものです。それが当町にとって持続可能な社会づくりにつながると思います。

町民誰もが、先人たちが紡いできた歩みを学び、この町でともに今を生きる自分たちの暮らしを確かめ、明日の平泉のあるべき姿を考えあう地域課題解決型学習を進める地域住民連携による学びを進めていきたいと思えます。

構想図は次の通りです。

### 全世代型「平泉学」構想図 ～過去に学び、今を見つめ、未来を考える～





岩手県 平泉町立長島小学校 「誇りをもって！古都平泉・長島を知ろう」

岩手県西磐井郡平泉町

2011年ユネスコ世界遺産登録

田んぼアート




平泉町立長島小学校 (全校88名)

学校目標 「つよがこくつじん」

スローガン 「たはしくしなやかに 生きていく長島の子」

長島小学校の「平泉学」

大切な大 復興遺産の地に生き、学んでいる一人として、**もとより平泉をよびたい**、その発展を支えるために **夢と高い志を持って学び、生きていこうとする 「つよがこくつじん」。**

大目標 子どもも大 (1)平泉・長島の良さを学び、**郷土に愛着をもつ子ども** (2)郷土の発展に対する**自身の役割を自覚し、責任を担いとる子ども**

生活科・社会科

学習全般・行事 復興教育

郷土教育

総合的な学習の時間 地域行事等への参加

2年 学級発表 3年 南院訪問

4年 平泉大文字まつり 5年 古事の新育成事業



II 実際の活動について

平泉学 第6学年テーマ **古都平泉を知ろう**

学区長島の歴史的・文化的価値について調べる

◎もっと長島の良さ、歴史的・文化的価値の存在を知るべき！  
◎郷土長島に愛着と誇りをもってほしい！

**誇りをもって！古都平泉・長島を知ろう**

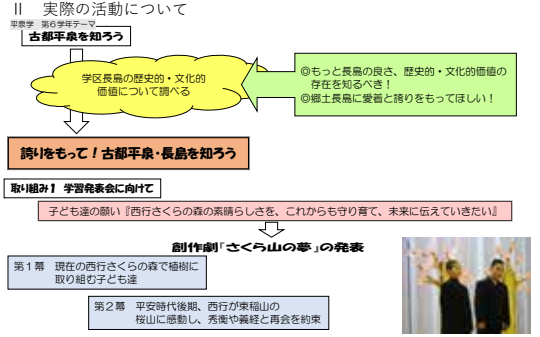
取り組み1 学習発表会に向けて

子ども達の願い『西行さくらの森の素晴らしいさを、これからも守り育て、未来に伝えていきたい！』

創作劇「さくら山の夢」の発表

第1幕 現在の西行さくらの森で植樹に取り組み子ども達

第2幕 平安時代後期、西行が東福山の桜山に感動し、芳楽や義経と再会を約束



第3幕 大正時代、大野瀧太郎が中心となり、桜山復活に立ち上がる

第4幕 100年後、東福山の桜山が復活し、未来の子ども達が夢を新たに

【子ども達のふり返り】

お話をきくに、長島の歴史・文化の素晴らしさを伝えることができた

自分達にしかできない発表ができた

調べたいこと

①長島の**自然**や**土地**の様子、変化  
②長島から**移住**された**土着・石巻・文化財**  
③長島の**昔**の様子、**町の子**の変化  
④**長島と仙台との関わり**、長島に**功績**を挙げた人物  
⑤**義経**氏の**活躍**と**世界遺産**

取り組み2 長島の良さを紹介するパンフレットの作成

子ども達の願い『自分達で調べた長島の良さをパンフレットにまとめ、平泉駅や観光協会など多くの人に見てもらえる場所に置かせていただき、地域の人が観光客に見てもらいたい！』



平泉文化遺産センターの見学、本やインターネットでの調べ学習

III 成果と課題

**成果**

- 1 自分達が生まれ育った**長島の良さ**を知り、**郷土に愛着と誇りをもつ子ども**も育成することができた。
- 2 **未来の自分、平泉について考え、発展する態度**を育てることができた。
- 3 自分達から発信するという活動を通して、**主体的に学ぶ姿勢**が見られた。

**課題**

- 1 平泉学における**学年間の系統性**を明確にする。
- 2 **地域教材や資料の発掘**、教えていただける人材の確保
- 3 **新たな地域作りに貢献**できるような子どもの育成



地球市民による地域資源を活用した  
SDGs・ESDカリキュラム開発

---

**気仙沼市教育委員会**

# ESD 円卓会議方式の創出と ESD/SDGs の実践

## (1) 気仙沼 ESD の特色

### 1 気仙沼 ESD の学びの分野

気仙沼市教育委員会では、宮城教育大学などの専門機関との連携を進めながら、教育の中核に ESD を置き、学校の特徴に合わせた地域課題の解決に向けた探究的な学習を推進している。

このことにより、図1のように、主に5つの分野について、産業、食、環境と人々の工夫や努力を関連づけて探究したり、伝統文化を継承するための学びを進めたりするなど、多様な学びが展開されている。



気仙沼 ESD の分野と主な事業

### 2 市の教育基盤としての ESD (幼小中高の連携と多様な機関との連携・協力)

地域の特色に応じた多様な学びを支える重要な要素は、地域の理解と協力、そして、専門的な機関との連携である。

図2は、気仙沼 ESD の推進体制を表したものである。気仙沼 ESD は、それぞれの分野において、地域の教育力を生かした取り組みが進み、大学等専門的な機関との連携も進んでいる。



気仙沼 ESD/RCE 推進体制

### 3 気仙沼 ESD/RCE 円卓会議

気仙沼市の ESD 推進において重要な役割を果たしてきた要素の一つが「気仙沼 ESD/RCE 円卓会議」(以下、円卓会議)である。

この円卓会議の特徴は、参加メンバーの多様性である。学校教育関係者のほか、宮城教育大学などの研究機関、社会教育関連や地域づくり、震災復興企画など行政の諸部局、地域の企業や NPO 法人、報道機関などが参加している。

この円卓会議では、講演や地域内外の実践の事例などを通して、ESD に関する最新の流れや課題等を学び合うほか、様々な立場で ESD を推進する方々を指定討論者とした迎え、テーマに沿ったパネルディスカッションを行い、今後の気仙沼 ESD のあるべき姿や連携のあり方について全体で話し合いをする場となっている。



気仙沼 ESD/RCE 円卓会議の様子

## 4 2019 ESD/RCE 円卓会議

- 1 日時 令和元年11月1日（金）10：30～17：00（午前：公開授業）
- 2 会場 気仙沼市立面瀬小学校 体育館
- 3 主催 気仙沼市教育委員会、ESD／ユネスコスクール・東北コンソーシアム  
気仙沼 ESD/RCE 推進委員会
- 4 共催 東北地方 ESD 活動支援センター
- 5 参加者 気仙沼市立幼・小・中学校教員、市内高等学校教員、大学・専門機関職員、  
行政担当者、産業関連団体職員、社会教育関係者、NGO/NPO 関連団体職員  
ESD 推進関係者、地域住民 等 計 約120名

### 【公開授業①】第2学年1組、学級活動『ミニ運動会をしよう』

面瀬小学校では、学びの土台となる主体性の向上を目指した取り組みとして、学級活動の充実をすすめている2年1組では、『ミニ運動会の開催と成功』を目指し、よりよい集会にするために、活動内容や係分担についての話し合い。

### 【公開授業②】第4学年1組、理科『ものの体積と温度』

教科学習と総合的な学習の時間で実践している『海洋教育』の授業。世界規模で問題になっている気候変動による海面上昇について、理科で学習した「金属、水及び空気は、温めたり冷やしたりすると、その体積が変わること」と関連づけて、考え合う、教科と総合のクロスカリキュラムによる単元開発の試み（提案授業）

### 【公開授業③】第5学年、総合的な学習の時間

#### 『学ぼう ふるさと気仙沼の海～面瀬海洋プロジェクト2019中間発表会～』

海や水産業、環境問題などの『海洋教育』に関する課題についてグループごとに探究活動。本時は、12の課題別グループがポスター発表を通して、これまでの学習の成果を中間発表。自分たちの生活と身近な環境のかかわりについていろいろな角度からさぐり、自分たちができることについて考えた。



授業の様子  
上から2年、4年、5年

- (1) 開会行事
- (2) 基調講演（地球規模で持続可能な社会を考える）



演題 「海から見た気候変動 ～どうやって測るの？ いま何が起きているの？～」

講師 国立研究開発法人 海洋研究開発機構

技術開発部観測技術研究開発グループ グループリーダー 石原 靖久 氏

- (3) 講話（変化の激しい地球・社会の中の今後のESD）



演題 「急激に変化する社会の中で求められる資質・能力を育成するESD」

講師 日本ユネスコ国内委員会 委員、

東京大学海洋教育センター主幹研究員 及川 幸彦 氏

(4) ESD・地域事例発表

【事例①：気仙沼市内の実践①】

大谷中学校 教諭 工藤 孝幸 先生  
～大谷地区の願いを生かした  
大谷っ子の探究～



【事例②：気仙沼市内の実践②】

気仙沼市立 面瀬小学校  
校長 谷山 知宏 先生  
～サステイナブルな学校をつくる  
震災を生きる子どもたちと共に～



気仙沼市内の実践に対する指導講評 宮城教育大学 教授 吉田 剛先生

- ① 地域資源の大切さの理解と生かす工夫についてよい実践を提供いただいた。
  - ・ 自然環境と産業 ・ 地域創生と教育の一体化
  - ・ 気付きや発見をもとに『自分事』として課題化して探究している。
- ② 総合的な学習の時間と教科学習の接続（クロスカリキュラム）の先進的挑戦的な実践である。
- ③ 教員養成大学として宮城教育大学は、気仙沼市と連携して、今後も学生に対して、価値ある実践を学ばせていきたい。

【他地域の事例に学ぶ・・・環境の再生】



演 題：『東京湾の再生に挑む』

講 師：認定 NPO 法人ふるさと東京を考える実行委員会 理事長 関口 雄三 氏

(5) 全体協議 ( パネルディスカッション )

ー 地域の課題をみつめ、地域資源を生かし、地域全体で進める「気仙沼 ESD」の今後 ー

コーディネーター 宮城教育大学 名誉教授 小金澤 孝昭 氏  
指定討論者 ( パネラー )

- |                          |             |
|--------------------------|-------------|
| ・ 認定 NPO ふるさと東京を考える実行委員会 | 理事長 関口 雄三 氏 |
| ・ 認定 NPO 法人 底上げ          | 理 事 成宮 崇史 氏 |
| ・ 面瀬公民館                  | 館 長 中井 充夫 氏 |
| ・ 気仙沼市教育委員会              | 教育長 小山 淳    |

◎ 中井 面瀬公民館長

- ・ 学校と地域をつなぐ『橋渡し役』 ・ 中学校との連携強化
- ・ 顔の見える環境づくり ・ 「やれることは、何でもやる。」

◎ 関口 ふるさと東京を考える実行委 理事長

- ・ 地域ができること、地域でなければできないことを実践する。
- ・ 仲間を広げ、ムーブメントへ・・・！

◎ 成宮 NPO 法人 代表

- ・ 震災復興支援からの気仙沼とのかかわり
- ・ 放課後の学習支援からスタート → 地元高校生「自分たちにもできることはありませんか？」
- ・ 『気仙沼のよさ』の再発見
- ・・・ 地元高校生を対象にした『探究型の学び』を支援＝未来の地域の担い手づくり



## ◎ 小山 市教育長

- ・気仙沼 ESD 新たなステージのスタート＝『思考の習慣化』

## (6) 総 括

宮城教育大学 教 授 市瀬 智紀 氏

- ・面瀬小学校というすばらしい環境の中で ESD、SDGs の実践に触れることができた。
- ・基調講演、研修講話から、地球温暖化など地球的課題が山積してること、今、人類存亡の危機に瀕していることをあらためて実感した。
- ・持続可能な社会の担い手づくりを目指す ESD は、学校だけでなく、地域や企業などあらゆる人々の力を結集して取り組まなければならない。
- ・SDGs を目標課題に取り組ませればよいのではないかとの意見も聞かれるが、持続可能な社会の担い手となるべく子どもの資質・能力を育てることを目的とする ESD を考える時、SDGs にどのように結びつくのかを明らかにし、大切に扱われなければならないと考える。

## (7) 閉会行事

気仙沼 ESD/RCE 推進委員会 委員長 齋藤 益男

## (2) 気仙沼 ESD カリキュラム

### 1 防災教育を軸にした取り組み

#### ① 東日本大震災の教育を踏まえて気仙沼市の防災教育

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震により発生した津波によって、気仙沼市は、千二百名を超える尊い命が奪われ、まちは壊滅的な被害をうけた。

気仙沼市は、これまでも度々津波の被害をうけ、明治三陸地震津波（1896年）、昭和三陸沖地震津波（1933年）、チリ地震津波（1960年）により、多くの家屋の破壊や尊い人命の犠牲があった。そのたびに、津波に対する警戒の意識が高まり、津波防災に対する取り組みは、他地域に比べ進んでいたと考えられる。

しかし、東北地方太平洋沖地震発生した大津波は、市が想定していたよりもはるかに大きな津波が襲来した。想定外の事態に対する備えと対応が十分にできなかったことが多くの犠牲者を生んだといえる。

こうした教訓を踏まえ、持続可能なまちづくりを考えたときに、気仙沼市にとって防災教育は、大きな意味をもつものとなっている。

気仙沼市教育委員会では、当時の学校教育課の指導主事や市教育研究員により、防災についての研究が進められ、その成果を、京都大学大学院地球環境学堂国際環境防災マネジメント論分野や特定非営利法人 SEEDs Asia の協力を得て、「防災学習シート」としてまとめ発行した。

この「防災学習シート」のなかに、次のように、ESD を基本理念とした防災・復興教育カリキュラム開発の考え方が示されている。

『持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだすためには、持続可能な社会づくりを捉える要素（構想概念）を防災の視点から明確にする必要がある。持続可能な社会づくりの構成概念は、「人を取り巻く環境（自然・文化・社会・経済など）に関する概念」と「人（集団・地域・社会・国など）の意思や行動に関する概念」の2つに大別される。「人や自然とのつながり」「地域の一員としての責任」「地域の未来像を描いて新たなまちづくりについて考えること」などを重視する防災教育は「持続可能な社会づくり」の構成概念と共有するねらいをもつものである。』

この考え方を中心におき、「持続可能な社会づくり（SD）」の構成概念を、「人を取り巻く環境（自然・文化・社会・経済など）に関する概念」については、「多様性、相互性、有限性」の3つを、「人（集団・地域・社会・国など）の意思や行動に関する概念」を「公平性、連携性、責任性」の3つを構成概念としてとらえ、内容を整理した。

特に、気仙沼市においては、「自ら考え行動する態度」を重視し、国立教育政策研究所が提案している学校教育における ESD で身に付けたい力7つの資質・能力に加えた。

本市では、震災の教訓として、防災教育における、「自助」「公助」「共助」のうち、「自助」が非常に重要な要素であるという認識を強くし、防災教育で重視する態度・能力をとらえ直した。

「自助」について、関係する能力・態度について考察することにより、「自分がおかれている状況をもとに、より良い行動について考え、積極的に行動する態度」が必要であると考え、先の7つの能力・態度に加え、「自ら考え行動する態度」を加え、8つの能力・態度を重視することとした。

この SD の構成概念と ESD で重視する能力・態度を、防災教育に対応させて内容を考え、次の表のように示している。



ESD で重視する能力・態度	防災教育で重視する能力・態度（例）
①「批判的に考える力」	防災についての正しい知識や情報をもとに、それを比較・検討し、よりよい解決法策を考える力
②「未来像を予測して計画を立てる力」	過去の災害を教訓に、より良い未来を予想・予測・期待し、見通しや目的意識をもって計画を立てる力
③「多面的・総合的に考える力」	防災について、自分、地域、社会などの視点から考え、建設的な発想をすることができる力
④「コミュニケーションを行う力」	防災に関する話し合いで自分の気持ちや考えを伝えるとともに、相手の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行う力
⑤「他者と協力する力」	災害時に、他者の立場に立ち、他者のことをよく考えて、協力・協働して行動しようとする態度
⑥「つながりを尊重する力」	防災学習を通し人同士のつながり、自分と地域のつながりを大切にしようとする態度
⑦「自ら進んで参加する態度」	防災学習において自分の責任や役割を意識しながら、自ら進んで行動しようとする態度
⑧ 自ら考え行動しようとする態度	自分の置かれた状況をもとに、災害から自らを守る適切な方法について考え、行動しようとする態度

## ② 気仙沼市内の学校等における防災教育の実際

### 【気仙沼市立階上中学校】

階上中学校は、東日本大震災以前から ESD の柱として防災教育に取り組んでおり、先進的な取り組みを続けている。

「自助」「共助」「公助」を1年サイクルで学び、在学中の3年間をととして探究的な防災学習を行う計画になっている。

階上中学校では、地域の多くの住民が津波の犠牲になった教訓を生かし、地域全体の防災への意識を高め、互いに連携していくことを大切にしている。

近隣の小学校や地域と連携した学びを計画に位置付け、「自助」の大切さや「共助」の在り方などを、生徒が探究の中でとらえた視点で伝えたり、共に考えたりしながら、「我らは未来の防災戦士」をキャッチフレーズにして取り組んでいる。

そうした中学校の防災教育に呼応するように「階上地区防災教育推進委員会」が立ち上がり、「地域連携型の防災教育」が行われている。

また、気仙沼市東日本大震災遺構「伝承館」との連携により、中学生の語り部の育成にも力をいれ、震災の教訓を語り継ぐ「伝承」をテーマとした学習も行われている。



地域の方への発信



グループでの防災に関する協議



小学生へ伝える様子



中学生の語り部活動

### 【気仙沼市立階上小学校】

階上小学校は、総合的な学習の時間で防災に関する学習を位置付けて、地域及び階上中学校との連携により防災教育に取り組んでいる。

階上中学校との連携では、中学生が小学校に訪れ、1年生から6年生までのそれぞれの学年で、紙芝居やクイズの楽しく学べるものから図上訓練まで、発達段階に応じて中学生が考えたプログラムで防災について学んでいる。

小学校の独自のカリキュラムとしては、地域の中で災害に遭遇したときに、どこにどのように避難することが命を守る行動につながるかについて、地域を調査したり、家族や地域の方々へのインタビューをしたりしながら考えている。

また、自分たちが考えまとめた避難マップを地域の人に提案し、意見をもらいながら、さらに深く考える学習も行われている。

### 【気仙沼市立唐桑中学校】

唐桑中学校では、平成29年度に統合した旧小原木中学校の取り組みを生かし、津波襲来の際の避難に役立つ取り組みとして、海拔表示設置活動に取り組んでいる。

海拔表示設置活動は、地域でのフィールドワークを通して「防災・減災」と「自助」の意識を高めさせ、「共助」「ボランティア」の精神を養わせること、そして、「中学生として地域（故郷）とどのように関わるか」「地域貢献、地域発展のためどのような行動をとるか」について考えさせることを目的としている。

地域学校協働活動推進員、NPO 団体、公民館、自治会長、建設会社測量技師など、地域の多様な人材の協力を得て、東日本大震災当時の被害状況調査・避難経路上の表示板取り付けなどを行っている。

### 【気仙沼市防災フォーラム】

気仙沼市では、学校における防災教育の成果や課題を市内の学校のみならず市民との共有を図ることを目的として、「気仙沼市防災フォーラム」を開催している。

このフォーラムは、市危機管理課と教育委員会の共催で、自治会の代表、地域の自主防災組織のリーダー、市行政関係者、幼稚園関係者、小中学校関係者、高等学校関係者のほか、一般市民にも参加を呼びかけて開催している。

学校での防災教育の取り組みを発表するほか、東北大学災害科学国際研究所の教授から講演をいただき、「命を守る」ために自分たちができることなどについてのワークショップを行っている。

本年度で5回目を迎えるフォーラムは、気仙沼市の防災に関する諸団体が一堂に介して学び合う場となっている。



標高表示を作る様子



地域の人と標高表示を取り付ける様子



学習成果を発表する中学生



ワークショップの様子

## 2 海洋教育に関する取り組み

気仙沼市の震災復興計画のキャッチフレーズは、「海と生きる」である。このフレーズに表れているように、気仙沼市は、これまでも、そして、これからの未来を創るうえでも「海」がテーマとなる。持続可能な気仙沼市を考えたときに、海に関する様々な課題の解決と、海がもつ可能性を生かしていくことが重要になる。

気仙沼市では、海に関する事柄をテーマにして課題解決学習のカリキュラムを構築し、実践している幼稚園、小学校、中学校がある。これらの幼小中は、海洋教育に関する推進連絡会を組織し、東京大学大学院附属海洋教育センターと連携し、気仙沼地域としての海洋教育の在り方を探るとともに、発達段階や地域の素材や人材を生かした実践を行っている。

海洋教育の取り組みについて、幼小中のつながりをもたせ、発展的に実践を行っている事例として唐桑中学校区の例を紹介する。

### ① 唐桑中学校区の連携体制について

唐桑地区には、幼稚園2園、小学校2校、中学校1校がある。平成の大合併前の唐桑町の時代から、社会教育に力を入れ学社連携事業に盛んに取り組んでいたこともあり、公民館事業として地域人材を活用した学校教育の支援が根付いている。

このような背景がある地域であるが、東北地方太平洋沖地震により発生した津波によって、沿岸部は壊滅的な被害をうけ、地区沿岸で行われてきた養殖業などにも深刻な影響がでた。

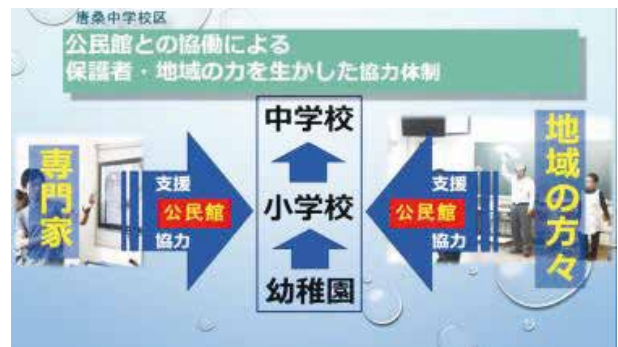
教育の中で当たり前のように行われてきた海とのつながりのある学習についても、学習フィールドが奪われた事によって、一時は途絶えざるを得なくなった。

しかしながら、沿岸部の復旧と漁業者の努力によって水産関係の仕事が行われるようになり、唐桑地区の海の学習環境は整ってきた。こうしたときに、地域に若者達が移住するなど、新たな力を得て、地域人材を活用した学びや活動が活性化し始めた。このような流れの中で、公民館が中心となって行う地域協働事業により、再び地域と学校とのつながりのある学習が行われるようになった。

現在は、震災前の学習に加え、東京大学や宮城教育大学の協力を得て、新たな実践も盛んに行われるようになってきている。

### ② 発達段階を考慮した学習連携

東京大学大学院附属海洋教育センターが示す海洋教育の4つの視点である「海に親しむ」「海を知る」「海を守る」「海を利用する」をそれぞれの発達段階に応じて重点的な取り組みを考え、学習連携を図っている。

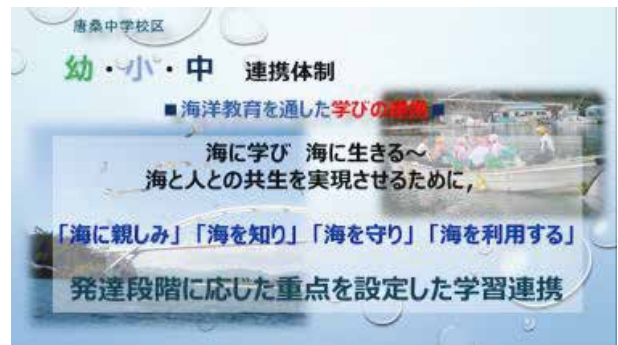


唐桑中学校の地域協力体制



唐桑中学校の海洋教育の連携の柱

幼稚園では海と親しむことを中心にし、地域の海岸での自然体験や地域の漁業者との触れ合いを遊びに生かしている。小学校では、それに加え「海を知る」ことについても学習に取り入れ、中学校では、「海を守る」「海を活用する」ことを中心にまちづくりという視点で学習を展開している。



唐桑中学校の海洋教育の学びの連携

### ③ 唐桑中学校内の幼小中の海洋教育の具体的な取り組み

これまで述べてきた唐桑中学校の取り組みの具体的な取り組みは次のとおりである。

#### 【気仙沼市立唐桑幼稚園】

## 「からくわたんけんにでかけよう」

～素敵な海に親しみ、あそぼう～

#### ● ねらい

身近にある唐桑の海での体験を重ね、遊びに生かすことで、素晴らしさや楽しさに気付かせ、将来もこの環境を大切にしていこうとする幼児を育成する。めざす幼児像は、以下の二点である。

- ・海での遊びを楽しみ、進んで関わろうとする幼児
- ・身近な海での体験を遊びの中に生かそうとする幼児

#### ● 学習活動の概要

##### (1) 指導に当たって

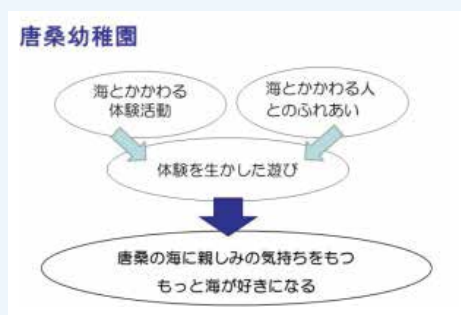
唐桑の海の素晴らしさや遊びに生かす楽しさを感じながら、今後もこの環境を大切にしていこうとする幼児の育成に迫るために、以下の二点を視点として、海洋教育に取り組んできた。

- ① 身近な海や海と関わる人とふれあうことができる体験活動の設定
- ② 体験活動を生かしたごっこ遊びの設定

##### (2) 保育実践

- ① 身近な海や海に関わる人とふれあうことができる体験活動の設定
  - ・唐桑漁協加工・出荷センター見学（6月）
  - ・唐桑漁協販売会参加（6月）

唐桑漁協加工・出荷センターでは、海の生き物とふれあう体験の他に、年長児と年中児は実際に漁船に乗せてもらったり、カキの養殖作業や流通について教えてもらったりした。



体験と幼児の意識の変容のイメージ



地域の方にキーホルダーを渡す園児

昼食時には、漁協の職員の方と一緒にワカメ汁を味わい、唐桑で獲れたワカメであることを伝え、  
「おいしいね」「幸せだね」「達人と一緒に食べられてうれしい」などと話す姿が見られた。また、  
唐桑漁協で行われた販売会に参加し、貝殻でつくったキーホルダーをお客さんにプレゼントした。

・うみのなつまつり～うみのたからものバーベキュー～(8月)

「うみのたからもの」というテーマで夏祭りを行う。保護者の協力のもと、「赤皿貝」「イカ」「わかめ汁」を調理し、味わった。「パパたちが焼いてくれた赤皿貝がおいしかった」という感想が聞かれ、保護者と一緒に経験したことは、幼児にとって思いが色濃く残るものとなったと考える。



うみのまつりの様子から

・舞根探検 (10月)

各年齢に合わせて、干潟遊び、釣り、いかだ見学を行った。いかだ見学を行った年長児は、実際に船に乗って湾内を探検したり、目の前でカキの巻き上げ作業を見たりすることで、唐桑の海の美しさや豊富さに感動し、海で働く人への憧れの気持ちが高まった。



船の上でお話を聞く園児

② 体験活動を生かしたごっこ遊びの設定

・からよう湾で遊ぼう

一年間を通して積み重ねてきた、唐桑での体験活動を生かして「からよう湾で遊ぼう」を展開する。体験を基に、「漁協コーナー」「いかだ・たからまるコーナー」「バーベキューコーナー」「釣りコーナー」「干潟コーナー」に分かれ、遊びに必要なものは何かを友達と相談したり、工夫したりしながら遊びを進めた。ごっこ遊びの中では、「海の仕事は大変だなあ」「唐桑のカキはおいしいよ」と言いながら海で働く人になりきり、体験時に感じた憧れや感動などの気持ちを抱きながら遊ぶ姿が見られた。



紙で作ったイカ焼きを売り買いする園児

【気仙沼市立唐桑小学校】

## 「未来に生きる人材育成」

～地域の豊かな体験学習と多様な交流を通じた豊かな心を持ち、  
ふるさと唐桑を愛する子どもの育成～

### ● ねらい

「未来に生きる人材の育成」のため、豊かな心を持ち、ふるさと唐桑を愛する子どもを育てる

### ● 学習活動の概要

#### (1) 地域の豊かな自然を実感する体験活動

##### ① 1・2年生「海に親しもう」

近くの浜で遊ぶ活動を通して、海のおいや音、風景を五感で感じ取り、「海と親しむ」体験や図工科と関連させて、様々な形や色の流木や石、海藻を材料にした作品を制作など。



唐桑小所有のカキ筏

##### ② 3年生「ワカメのひみつを知ろう」

地元で養殖されているワカメを題材とした学習。ワカメの生態に興味をもたせ、調べ学習や、ワカメの養殖業者へのインタビュー、加工工場への見学などを通して、ワカメが地域の特産物であることへの気付きから地元の産業や環境に興味をもたせる。

##### ③ 4年生「カキの秘密を探ろう」

カキ養殖体験の1年目としてカキの種はさみ作業を体験と学習支援者との交流。カキの解剖による体の仕組みや観察して成長のひみつ調べ。カキ筏の仕組みを理解するための「カキ筏の模型製作をととした地域の人々の苦労や工夫の理解。

##### ④ 5年生「カキが育つ環境を考えよう」

2年目となるカキ養殖体験としてのカキの耳つり作業。カキのエサとなるプランクトンの存在を実際にその目で確かめ、森川海の結びつきとその環境について考える。海の豊かさは森の豊かさと結びついていることの理解。

##### ⑤ 6年生「豊かな海を発信しよう」

海洋教育の最終段階としての、様々な場面でカキ養殖を中心とした6年間の学びを発信することを念頭に学習。唐桑のよさをどのような方法で発信するかを自分たちの課題としてとらえ、唐桑のカキをPRするための方法を考え選択し発信。ふるさと唐桑の自然の豊かさや人との関わりを深め、地域の人々の思いの理解。養殖体験3年目として温湯処理作業やカキの水揚げ作業やカキむき作業を行い、3年間のカキ養殖体験をまとめる、海の豊かさ、人々の関わりを知り唐桑の未来を考える。

#### (2) 海洋教育を支える人々とのつながりを大切に地域連携

学校支援委員会（若手漁業者・漁協の職員等）や唐桑公民館と連携し、地域の方とのつながりを大切に体験活動（カキ養殖体験・カキ祭でのカキ販売・定置網起こし体験等）を全学年で行うことによって、児童は地域の人々から学ぶよさを実感した。



地域の人にカキ剥きを教わる様子

### (3) ふるさと唐桑に対する思いを共有する場「リアスサミット in 唐桑」の開催

全校の取り組みとして、海に関わる学びを発表するとともに地域の方への感謝の気持ちを伝える場を設けた。「リアスサミット in 唐桑」を開くために、児童は主体的・協働的に学ぶ機会を多くもつことになり、学びの深化が図られた。また、参観者が児童の発表を通して地域のよさを再認識したことは、「自分でも地域に影響を与える行動ができる」という児童の自信につながり、児童に「地域の未来を担っていく」という自覚を促すきっかけとなった。

#### 【気仙沼市立中井小学校】

## 「ふるさとを見つめながら、未来に生きる子どもを育てる」

### ● ねらい

- ・自分たちが生活している地域の自然環境や産業、伝統などについて興味をもたせ、海と深く関わってきた人々に暮らしに気付かせる。
- ・「海に親しむ学習」「海を知る学習」「海を守る学習」「海を利用する学習」を通して、ふるさとの海の豊かさを実感させる。さらに、地域の魅力や課題、世界で起きている環境問題を把握し、地域の魅力を発信したり、課題や問題を解決するために自分たちにできることを考えさせたりする。
- ・地域に暮らす人々の思い、脈々と伝わってきた伝統や文化を理解し、ふるさとをいつまでも大切にしようとする態度を育てる。

### ● 学習活動の概要

#### ① 全学年「中井の遊歩道を歩く会」等

全学年に海洋教育を広げていくというねらいのもと、「中井の遊歩道を歩く会」を実施。縦割り班ごとに学区内の御崎野営場から学校付近まで続く海岸沿いの遊歩道を散策。地元ボランティアガイドの協力を得て、途中の観光スポットや歴史的な名所、自然について説明をもらいながら、学校までの約3kmを歩く。



ガイドさんから説明を受ける児童  
(中井の遊歩道を歩く会)

#### ② 1・2学年「鮭の稚魚の放流」等

公民館の協力の下、鮭の稚魚の放流を実施。5年の網起こし体験に通じる活動。その他、地域の自然に親しんだり、名人を訪ねたりする活動を実施。

#### ③ 3学年「魚市場や地域の名勝地の見学」等

魚市場や地域の名勝「折石」などを見学し、より広い範囲で地域への理解を深めた。地域の方が町おこしで始めた「大唐桑」について学ぶため、地域人材や施設との交流も行う。

④ 4学年「地域の伝統芸能の体験」等

地元で伝わる「松園虎舞」「神止七福神舞」「崎浜大漁唄込」の3つの伝統芸能について学ぶ。いずれも海に関係の深い伝統芸能であり、それらを大切にしてきた地域の人々の思いに触れる。

⑤ 5学年「見つめよう！ふるさとの海 ～わたしたちを取りまく世界～」の活動

水辺の生物観察、網起こし体験、鮭の調理教室、浜辺の清掃活動などの体験活動と並行し、マイクロプラスチックについての調査活動。さらに、「森は海の恋人運動」と教科領域を関連させながら、自分たちが行うことのできる自然環境保全の取り組みについて考える。実際にプラスチックごみを減らすために、「給食のストローを使用しない」「エコバッグを使う」「ごみ拾い活動をする」など自分たちにできることを実行。



地元の沖で網起こし体験

⑥ 6学年「未来の町づくり」等

地域の歴史に触れる、現状を知る、未来について考えるという柱のもと、「鯨塚」等の史跡見学や、地元で活躍する方々（漁師や農家の方等）を講師に迎えてのインタビュー活動などを実施した。地域の「町づくり発表会」にも参加。

※ 各学年の体験活動の多くは「ふるさと学習」の一環として、中井公民館の協力を得て実施

【気仙沼市立唐桑中学校】

## 『海のまち』唐桑の未来を考える

海のまちとして、どのようなまちを目指し、そのためにどうしていけばいいのか？

### ● ねらい

海洋と人間そして古里の関係についての理解を深めさせるとともに、海洋環境の保全を図りつつ国際的な理解に立った平和的かつ持続可能な海洋の開発と利用を可能とする知識、技能、思考力、判断力、表現力を有する人材の育成を目指す。この目的を達成するために、海洋教育では、海に親しみ、海を知り、海を守り、海を利用する学習を推進する。この際、幼稚園、小学校、中学校の発達段階に応じて、「海に親しむ」ことから始め、「海を知る」ことで海への関心を高め、さらに海と人との共生のために「海を利用」しながら「海を守る」ことの大切さを学ばせる。

### ● 学習活動の概要

校種毎の連携を踏まえ、中学校では、総合的な学習の時間を活用して「まちづくり」をテーマに学年ごとに取り組んだ。1年生は「防災のまち唐桑」をテーマに、2年生は「福祉のまち唐桑」をテーマに、そして3年生は「海のまち唐桑」をテーマに学習した。





① 「防災のまち唐桑」1年生

海拔表示活動は、当中学校が統合する以前の旧小原木中学校が取り組んでいた活動を受け継いだもので、震災（津波）での教訓を生かした活動である。ユニバーサルデザインに基づいた海拔表示を、地形を現地調査しながら設置する活動で、海で暮らす人々を津波から守るという活動である。今年度は、主に海拔表示のメンテナンス及び標高の再調査を行った。標高を再調査する活動においては、精度のある正確な標高を調べるため、測量の専門家を講師に迎え活動した。



標高の再調査活動の様子

② 「海のまち唐桑」

3年生は、「『海のまち』として、どのようなまちを目指し、そのためにどうしていけばいいのか」という課題に取り組んだ。「海のまち唐桑の未来を考える」というテーマで、現在の唐桑から未来の唐桑にどのようにつなげていけば良いのかを考えるため、「食」「観光」「漁業」「コミュニティ」の4チームに分かれ、探求活動を行った。

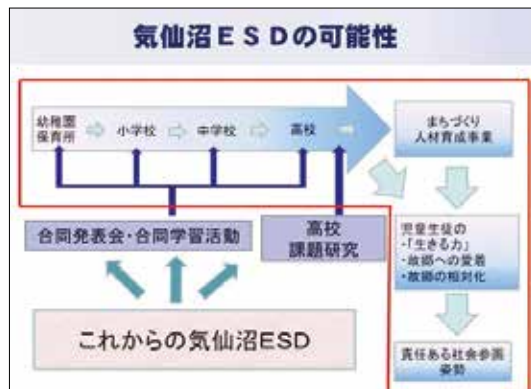


### (3) これからの気仙沼 ESD

気仙沼 ESD については、これまで培ってきた地域の課題に根ざした体験とそこでの気づきを生かした探究学習をさらに深化させていきたいと考えている。

そのひとつとして、幼稚園から高校までの連続した流れの学びから、地域を創る力を備えた人材の育成がある。

まず、幼児教育の段階から高校までの教育を見据え、指導者が、それぞれの発達段階で培う資質・能力を共有する。その上で、合同発表会や、下の年代を上的年代が教え導く合同活動等を行い、それぞれの段階をつなげていく。そして、高校での課題研究に取り組みと「まちづくり人材育成事業」とをリンクさせていく。この流れは、現在も行われていることではあるが、今後は、市の教育全体として取り組んでいくことにより、ESD を核とした切れ目のない教育を実現し、人材育成を目指していきたい。



そのために、ESD に関する価値を理解し、その価値に基づいた学習を展開し、行動に結びつけていくという「価値の行動化」を図りながら、気仙沼の子供たちが、身の回りの出来事に関心を持ち、評価・判断しながら、自分がいかに関わるかということを考えることができる「思考の習慣化」を目指していきたい。

さらに、気仙沼 ESD を深化・発展させるために、①「さらなる探究型へ」 ②「教科等学習とのリンクの見直しと強化」 ③「幼保小中高でのコアの共有」 ④「一般市民を巻き込んだ協働的な展開」 ⑤「探究学習コーディネータの配置」の5つの視点で、改善を図っていきたいと考える。



地球市民による地域資源を活用した  
SDGs・ESDカリキュラム開発

---

# 大崎地域 世界農業遺産 推進協議会

# 「守るために活かす」世界農業遺産“大崎耕土”を活かした持続可能な地域づくり

## (1) 世界農業遺産“大崎耕土”

### 1 世界農業遺産とは

世界農業遺産という認定制度をご存知でしょうか。有名な世界文化遺産や世界自然遺産はユネスコが認定しているものですが、世界農業遺産は同じく国連の組織であるFAO（国連食糧農業機関）が認定しているものです。

FAOは、第2次世界大戦後、農業の近代化による食料増産や途上国への食料支援等で重要な役割を果たしてきました。一方、農業の近代化が進む中で、地域の環境に根差した伝統的な農法、生物多様性、農耕儀礼、食文化、景観等が急速に失われてきた面も否めません。このようなことを背景として、2002年、FAOにより、世界的に重要な農業のシステムを保全することを目的としてスタートしたものです。

### 2 世界農業遺産申請の背景

世界農業遺産に申請しようと思いついたきっかけは2011年の東日本大震災にあります。震災によりインフラが機能しない中、大崎地域では、「契約講」と言われる共同体を基盤とした共助が機能し、食料と情報の共有が図られ、難局を乗り切りました。また、用排水機能がダメージを受け、米づくりが可能か心配されましたが、農家主体の水管理体制を基盤とした復旧が進み、速やかに米づくりが再開できました。このようなことを通じて、本地域の巧みな水管理を軸とした農業システムのレジリエンス性を実感することができました。

素晴らしい農業システムとそれが育む農村社会を享受している大崎地域の住民の役割は、これらをしっかりと次世代に継承していくとともに、その価値を国内外で共有すべきだとの想いに至りました。このような想いと世界農業遺産がぴったりと合致したのです。



図-1 大崎耕土の位置図

### 3 東北初の世界農業遺産認定

2017年12月、大崎市、色麻町、加美町、涌谷町、美里町の1市4町を対象エリアとした「持続可能な農業を支える大崎耕土の伝統的な水管理システム」が世界農業遺産として認定されました。これは、北海道・東北地域では初めての認定であると同時に、稲作水田地帯としては世界で初めての認定となったものです。

大崎耕土は約1,500km<sup>2</sup>にも及ぶ広大な地域であり、江合川と鳴瀬川の流域に水田農業地帯が広がっています。現在の一大



図-2 FAO から認定証を授与  
(2018年4月)

穀倉地帯の景観をみると、以前から稲作に適した地域であると言われても何ら疑問に感じないかもしれませんが、東北太平洋側特有の冷たく湿った季節風「やませ」による冷害、山間部の急勾配地帯の渇水、そして平野部の緩勾配の地帯の洪水といった3重苦に悩まされた地域でした。

厳しい自然環境下で、先人達が食料と生計を維持する様々な工夫を凝らしながら、一大穀倉地帯を築き上げてきたのであり、現在の大崎耕土の景観は、その苦労と知恵の結晶と言えます。

水との関わりは大崎耕土の歴史を語る上では不可欠であり、環境に応じた水管理の在り方は大崎耕土が世界農業遺産認定を受ける上での重要な要素となりました。中世以降、取水堰や隧道・潜穴と呼ばれる水路トンネル、ため池、用排水路網が整備され、大崎耕土の水路延長は6,000km、ため池は1,000以上にのぼります。これらをすべて人力で作上げた苦労は相当なものであったと思われます。

大崎市の岩出山にある内川は、400年以上前に伊達政宗公が江合川に堰をつくり水を引いた人工の水路であり、現在も3千ha以上の水田を潤しています。伊達政宗公が青年時代の11年間は大崎市に拠点を置いていました。歴史上最も有名な武将の一人である政宗公の基盤を作り上げたのは大崎耕土と言っても決して過言ではありません。内川は、世界灌漑施設遺産にも登録された重要な灌漑インフラであるとともに、生活用水としても利用されており、城下町の風情ある景観をもたらしています。

また、洪水や冬の北西風から農家を守る屋敷林「居久根（いぐね）」も大崎耕土の特徴として挙げられます。居久根は、大崎地域の風土に根付いたものであり、現在でも大崎耕土の全家屋の4割に当たる約2万4千戸が居久根を有しています。

春先には水田の中に居久根がある家屋が点在する“水田に浮かぶ森”として大崎地域独特の景観を生み出します。周辺の水田や水路網とつながり、多様な生物の生息環境も提供しており、持続可能な農業の実践にも一役買っています。このような生活の中で、発酵食文化や独特の伝統芸能なども受け継がれてきました。

大崎市には、国内の市町村で唯一、2つのラムサール条約に登録された湿地を有しています。登録湿地の化女沼や蕪栗沼及び周辺水田は、国内に飛来するマガンの約9割が飛来する地です。至近距離で数万羽のマガンの大群が見られるのは世界でも大崎地域だけであり、唯一無二の価値を有しています。



図-3 大崎耕土ロゴマークのお披露目  
(2018年5月)



図-4 伊達政宗公が築いた内川



図-5 水田に浮かぶ森“居久根（いぐね）”



図-6 10万羽以上のマガンが飛来

## (2) 大崎耕土の地域資源を活かした取り組み

### 1 守るために活かす

このように、大崎地域には世界に誇る地域資源が数多くあります。先人たちが数百年にわたって守り続けた“大崎耕土”の貴重な宝を守るためには、単に守るだけではなく、その価値を地域の住民と共有し、市内外の方々と交流していきながら、地域資源を活かす取り組みを進めていくことが重要だと考えています。

このためには、農業関係者や地域住民だけではなく、幅広い分野の方の参画が不可欠であり、世界農業遺産の認定を契機に、農業関係団体、商工業関係団体、学術機関、消費者団体、観光分野、教育分野、金融機関、NPO など、多様な主体の参画の下、2018年7月に「アクションプラン推進会議」を立ち上げました。推進会議では、大崎耕土の地域資源を「守るために活かす」をテーマとして、3つの柱で取り組みを進めることとしました。

一つ目は、フィールドミュージアムの構築による地域資源の魅力の再発見を通じた動的な保全と活用を図る「フィールドミュージアム構想」、二つ目は、地域資源の価値の発信を通じた持続的農業の推進を図る「農産物等ブランド認証制度」、三つ目は、農業の知恵の継承と価値の共有を図る「人材育成」です。

表-1 世界農業遺産の取り組みの3本柱

① 多様な資源を巡るツーリズムを核とした交流人口の拡大（フィールドミュージアム構想）
② ブランディングによる価値の共有と向上を通じた持続的農業の推進（農産物等ブランド認証制度）
③ 人材育成の推進による農業の知恵の継承

### 2 フィールドミュージアム構想

現在のツーリズムのスタイルは、ゆっくりと時間を過ごし、その地域ならではの体験に価値を感じる方が増えています。そのような潮流も取り込み、大崎耕土の様々な地域資源を博物館の展示物のように巡ったり、体験すること等により、地域の方々の理解の醸成と交流人口の拡大を目指すのが“フィールドミュージアム構想”です。

また、海外の観光客の数は大崎地域でも確実に増加しています。そのような中で、世界農業遺産に認定された巧みな水管理が生み出した景観、発酵食等の食文化・農文化、自然共生の取り組みなどは、大崎ならではのツーリズムを展開する絶好の武器になると考えています。

同時に、大崎耕土にある地域資源を巡れるようにするためには、まず、これらの地域資源の“見える化”をしていく必要があります。どの場所にどのような地域資源が分布しているかということはもちろんですが、これらにどのような歴史的・文化的価値等があるのか、分かりやすくストーリー化していくことで大崎耕土の価値を表現していくことが必要であると考えています。

このような考えの下、年度毎に取り組み内容が深化していくよう、3か年（2019年～2021年）を当面の取り組み期間として位置付け、PDCAで課題を抽出しながら改良・改善を図っていくこととしています。

2019年については、行政、農業分野、観光分野、商業分野、学術機関（大学等）、金融機関、NPO等からなる「アクションプラン推進会議」が中心となり、大崎耕土ツーリズム資源の掘り起こしによるフィールドミュージアムマップの作成を行うなど、埋もれていた魅力的なツーリズム地域資源を“見える化”する「コンテンツ」の作成を行う期間として、地域資源を活かした“大崎耕土ツーリズム”の推進に向けた交流人口拡大の基礎づくりを行っています。

2020年は、1年目でコンテンツ制作した地域資源を観光団体や民泊農家、農業者等と連携し、現在提供できていない新たなツーリズムのサービスとして創出し、世界農業遺産として認められた農耕文化、食文化、屋敷林（居久根）のほか、既存の観光資源である鳴子温泉やスキー場、道の駅なども活用しながら周遊性を高め、ゆとり滞在型ツーリズムを推進する交流人口拡大の期間として位置付けます。首都圏、インバウンド向けのツーリズムの企画・運用にあたっては、モニターツアーを実施し、顧客ニーズを把握した上でツーリズムのサービス化を図っていきます。

2021年は、モニターツアーの結果等を踏まえて、商品の検証とブラッシュアップを行うとともに受入環境を整備します。多くの来訪者の満足度を向上させ、同時に、地域のそれぞれの活動への誇りを醸成し、継続した取り組みとなるためのブラッシュアップの期間として、また、“大崎耕土ツーリズム”の体験型サービスを提供し、顧客目線で新たな集客サービスを企画運営していく組織を構築するなど「受入体制の環境整備」の期間として位置付けています。

このように、順次進めていくこととなりますが、2019年度に重点的に取り組んでいる“見える化”のコンテンツ作成については、以下のようなものになります。

## ① フィールドミュージアムマップの作成

大崎耕土の理解を深め、来訪者が情報発信拠点で気軽に手に取り、「訪問前～訪問時～訪問後」も利用できるコンテンツとしてフィールドミュージアムマップを作成します。これは、日頃見過ごしがちな地域の資源を住民が新たな発見として活用し、理解促進や誇りの醸成につなげていくことにも活用することを期待するものです。

具体的には、旧市町単位の11エリアで地域資源を地図やアイコンを使い世界農業遺産「大崎耕土」をわかりやすい形で表現するとともに、代表的な地域資源については、地域のキーマンであるキュレーターにより歴史や詳細情報などの想いを掲載します。



図-7 フィールドミュージアムマップ



図-8 キュレーターによる紹介

## ② 地域ストーリー・散策ルート

フィールドミュージアムマップをさらに奥の深いものとしていくため、大崎耕土の魅力を深掘りして、更なる関心の促進や訪問のきっかけとなる散策ルートを作成するとともに、来訪者が大崎耕土に興味を持ったあと、実際に訪れるきっかけとなるものや地域住民が歴史や機能の学習に利用するものとして、フィールドミュージアムマップと同様に11エリアの地域資源を整理し、地域独自の特色や歴史を表現したストーリー集

を作成し、「大崎耕土」の魅力を創出するものです。

なお、11エリアのストーリーは、各地域のバラエティーに富んだ水利用の方法や独自の食文化などを引き出し、以下のような切り口で整理を行っているところです。



図-9 散策ルートとストーリー集

表-2 11エリアのストーリー(案)

鳴子	大崎耕土山間地での米作り
岩出山	城下町の水と食、居久根の生活
田尻	水と暮らし、住民の安全と暮らしを守る知恵と技術
古川	古川の里地里山をめぐる
三本木	荒川堰用水の歴史と居久根の風景
松山	伊達家家臣茂庭家の城下町と発酵食文化
鹿島台	品井沼干拓の歴史を知る
加美町	伊達藩時代から現代に至る用水確保
色麻町	丘陵に囲まれた低平地での農業景観
涌谷町	籠峯寺に関わる伝統農耕行事体験
美里町	名緒沼遊水地を中心としたしなやかな水管理

### ③ 映像制作

文字ベースだけだと伝わりにくい地域住民の工夫や想いを臨場感をもって伝えるため、2019年度は、案内板に対応した30の地域資源を映像化し、地域の語り部が登場し、ストーリーや想いを語る2分程度の映像を制作します。また、イベント等でも使用できる5分程度の大崎耕土 PR 映像を制作します。



図-10 語り部が登場する映像制作の光景

### ④ 案内板の設置

フィールドミュージアムマップや散策ルートと連動して、来訪者が実際にそれぞれの場所を訪れる際の情報ツールとして、また、地域住民が実際に訪れ学習に利用する際に活用するものとして、案内板の整備を行っていきます。また、案内板だけでは伝えきれない地域資源の情報は、案内板にQRコードを載せて制作した映像をウェブサイトと連動させるなど、付加的な情報をスムーズにとれるような構成とします。



図-11 地域資源を巡る案内板



## ⑤ フィールドミュージアム拠点整備

2019年7月には、大崎市の中心市街地に“道の駅おおさき”が誕生しました。このような場を大崎耕土の魅力の発信拠点に位置付け、さらに各エリアに足を運んでいただけるような仕組みづくりに取り組んでいます。

今後は、新たな庁舎が完成する大崎市の田尻総合支所や廃校などのスペースも有効活用しながら、交流拠点・情報発信拠点を広げていく考えです。



図-12 情報発信拠点“道の駅おおさき”



図-13 道の駅おおさきの情報発信スペース

## ⑥ 食・農体験等の受入体制の確立

多くの来訪者の楽しみである食や、近年のツーリズムの流れである体験型のメニューを提供していくため、食・農体験のコンテンツ集の作成を行っています。これらのコンテンツは、公開することにより、地域づくりを行っている団体や旅行会社での商品づくりのヒント集となることを期待するものです。



図-14 食・農体験のコンテンツ集

## ⑦ プロモーションと機運醸成の取り組み

現状では、大崎地域の知名度や世界農業遺産の認知度が高いとは必ずしも言えない状況です。このようなことから、大崎地域の魅力を発信していくため、広報・プロモーションの取り組みを行っています。

2019年の夏に横浜市で開催された楽天による“5Gを超えて”をテーマに約10万人の来場者があった“Rakuten Optimism 2019”では、大崎耕土の認知とブランド価値向上を図るため、大崎耕土のバーチャルリアリティ（VR）映像を展示し、好評を博したところでした。同映像はこれ以外にも様々なイベント等で活用しています。



図-15 世界農業遺産 VR 映像

また、同年10月には「大崎耕土ツーリズム研修会」を開催し、1市4町の地域住民約60人が参加し、ワークショップを実施しました。居久根・水管理・生物多様性・食文化などをテーマに、課題や今後の可能性などについて話し合いを行い、理解促進や交流人口の拡大に向けた課題等について共有化を図っています。



図-16 ワークショップの光景

## ⑧ 居久根の保全・活用を目指して

大崎耕土の世界農業遺産認定における重要な構成要素として、大崎耕土に24,300ある屋敷林「居久根」の景観・生物多様性・農文化等における役割の大きさが挙げられます。

居久根は大崎地域を象徴する景観を構成している一方で、現代の生活様式の変化等により、伐採が進む等、世界に誇る地域資源が失われつつあるとの指摘もなされているところです。このような背景を踏まえ、今後の大崎耕土における「居久根」の保全と活用について検討するため、2019年9月に「大崎耕土「居久根」の保全活用に関する検討会」を設置しました。

仙台藩は居久根の維持を重要視しており、伊達政宗公は、河川氾濫原の水田利用を行う際、農家の洪水被害の軽減策として居久根の伐採を藩の許可制とし、伐採する木の太さに応じた本数の苗木を新たに植える決まりを設けてきました。また、藩内17か所に苗床を持っていたといわれ、400年前に、減災や環境保全機能を維持するミティゲーションの考えが存在していました。

このような歴史的な背景も踏まえ、現代の生活スタイルや価値観に沿った保全・活用体制の検討を行っています。

居久根を抱える家屋は数多くあるため、重点的に検討を深めていけるよう、地域バランスなども考慮してモデル地域を3地域に定め、課題の整理や共助・公助の在り方等の検討を行っているところです。

同時に、今後の学習活動や見学の受け入れ先を多くの地域に広め、居久根の価値の共有化を図るためには、モデル地域での取り組みだけでなく、できるだけ多くの方々の協力が不可欠です。このような活動に共感していただける方の発掘を行っていくため、「未来に残したい居久根～見てけらいん！おらほの居久根～」と題して賛同者を募集しています。今後は、後述する（仮称）世界農業遺産副読本の現場体験での協力等、地域学習の機会での連携等を考えています。

図-17 未来に残したい居久根の募集



図-18 女子大生も居久根の保全管理を体験

また、共助による保全の取り組みを進めていくための検証を行うため、モデル地域で仙台の大学生などの参加による保全体験会を行いました。日頃、見ることはあっても関わることのない居久根の管理を実際に体験する中で、景観的な価値はさることながら、生活の知恵としての居久根の価値を学ぶ良い機会となったとの声を多くいただきました。

### 3 農産物等のブランド認証制度

“農産物等のブランド認証制度”は、大崎耕土で生産された農産物や工芸品等の付加価値向上を図るものであり、認証制度は、まず米から開始し、2019年産米から世界農業遺産地域の認証米として販売しています。

本認証の特徴は、米の認証については、大崎市にある宮城県古川農業試験場で開発された品種であること、農薬化学肥料の使用が慣行比5割削減であること、さらに、生き物のモニタリングを実施することを必須要件としていることが特徴です。これだけの広域で生き物調査を行う認証制度は国内でも初めての取り組みになります。

生き物調査の結果をフィードバックし、共有することは、農家の方々が自分の田んぼの状態を客観的に把握する手段として有効であり、これらの調査を継続することで、生き物や環境への意識を高めていく“成長する認証制度”として深化していくことを期待するものです。

また、これに加えて、選択要件としてJAS有機農産物認証の取得、GAPの取得、多面的機能支払活動への参加、大崎地域を代表する希少品種を保全する取り組み、産地と消費者の交流など交流事業の実施の一つ以上を取り組むことを要件としています。今後は対象品目を他の品目や加工品等に順次拡大していく予定です。

2019年度は、翌年度からの本格的な生き物調査の実施を行うため、認証要件である生き物モニタリングの研修会を4回開催しました。本研修会には、大崎地域の農家133名の参加がありました。また、初年度にも関わらず、約350名もの米の生産者が認証制度への登録申請を行っています。2019年度の運用を踏まえ、認知度の向上や申請書式等の改善等を図っていきます。認証制度を通じて、持続可能な農業を行っている大崎耕土の農業関係者の運動論として広げていき、このような取り組みが市場からも評価され、消費者がより大崎の米を手にとっていただき、農家収入の向上と大崎地域の価値の向上につながる



図-19 ブランド認証のロゴマーク

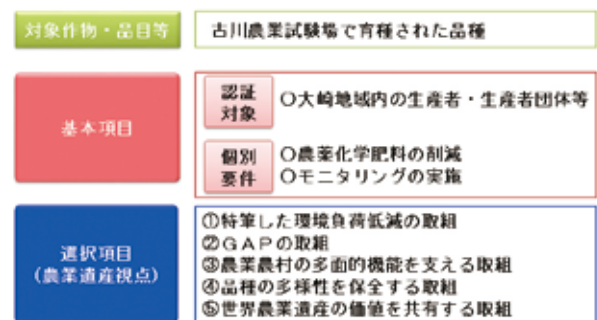


図-20 農産物等認証制度（米）の概要



図-21 生き物モニタリングの研修会

よう努めていく考えです。

なお、研修会の実施に際してはアンケートを行い、参加者の感想を把握しています。研修に参加した農家は現段階において、田んぼの生物多様性への意識度は、「とても重要だと思う」と「まあ重要だと思う」を合わせると94%という結果となりました。

同時に、田んぼの生物多様性に関わっていききたいかの問いには、「ある程度関わりたい」が約半分を占めており、あまり大きな負担感なく生物多様性の取り組みに関わっていききたいとの農家の本音も出ています。質は確保しつつも、あまりハードルを上げすぎないように取り組んでいくことで、より多くの農家の方が認証制度に参画いただき、広域で生き物調査に取り組んでいる地域としていきたいと考えています。

特に、生き物調査は実施するだけでなく、農家にフィードバックしていくことが重要です。このため、これまでも生き物調査での実績があり、今般の認証制度の構築にも携わっていただいた地元のNPOと連携し、各調査圃場の生き物調査の結果や全体的な傾向をとりまとめ、各圃場の“立ち位置”を分かりやすく提示することを考えています。さらに、生物多様性向上のためのヒント集を提示することで、各農家の今後の営農活動の今後の指針にしていただき、大崎耕土全体で環境意識の高い農家の育成を図っていききたいと考えています。

その中でも、大崎地域での米のブランド化の取り組みとしては、大崎市や古川農業試験場、JA、流通業者、実需者等によって設立された「大崎の米『ささ結』ブランドコンソーシアム」を中心とした「ささ結」のブランド米は、市場からの評価が高まっています。「ささ結」についても、認証要件として生き物調査を義務付け、2019年から、農産物ブランド認証を受けた米としての販売を行っています。

「大崎の米『ささ結』ブランドコンソーシアム」の米に関わる各機関が一体となったブランド化の取り組みは地方創生の観点でも高い評価をいただき、2018年には、内閣官房・農林水産省主催の「ディスカバー農山漁村（むら）の宝」に選定され、東北で最も優秀な取り組みとして表彰をいただいたところです。

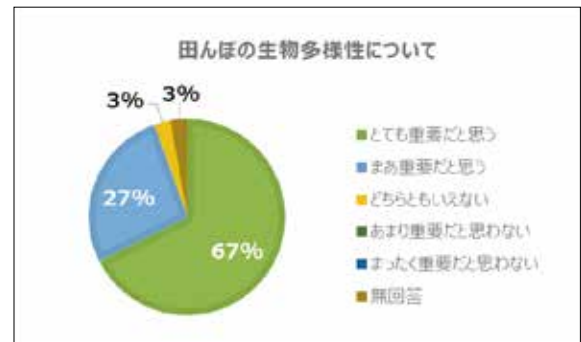


図-22 アンケート結果①

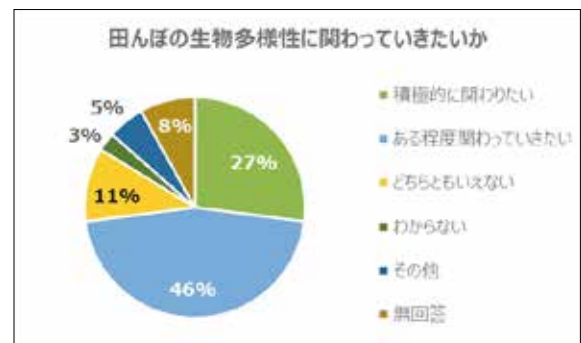


図-23 アンケート結果②



図-24 生物多様性向上のヒント集（イメージ）



図-25 総理官邸での交流会

## 4 人材育成

これらを推進していく上で、先人の知恵と努力を次世代に伝え、誇るべき郷土の宝として継承していくための人材育成を行っていくことは不可欠です。このようなことを踏まえ、2020年度から1市4町の小学校3～6年生の全員に“（仮称）世界農業遺産副読本”を配布し、学校教育の中で大崎の魅力を学ぶ機会を設け、地域への理解を深める取り組みを進めていくこととしています。

副読本の作成は、1市4町の教育委員会の参画の下で編集会議を構成し、地域事情にも精通した各教育委員会の教員が執筆作業を行っています。

このような学校での副読本を用いた学習をきっかけに、地域の方々と大崎地域の魅力を共有し、世界農業遺産認定地域に暮らすことへの誇りを醸成していきたいと考えています。

このような学校教育の場で、世界農業遺産“大崎耕土”の学びを提供するようなことを通じ、より深く地域の自然や生き物に興味を持った子どもたちには、大崎市が中心となり、地域のNPOと連携して行っている「おおさき生きものクラブ」への参加を誘導していきたいと考えています。

おおさき生きものクラブでは、森林や田んぼ等の自然環境、身近にいる生きものたちとの「ふれあい」と「気づき」とおして「自然と共生した持続可能な地域社会づくり」を担っていただく子どもたちの育成を目的に2013年からプログラム化を図っているところです。

小学1年生～中学3年生を対象として、各協力団体が主催し、年間10回程度開催する「一般プログラム」、さらには、身近な生きものを見分け方や里山の管理など、1年を通じてより詳しく体系的な学習・体験プログラム化し、国内外の子ども達との交流・学習プログラムにも参加する「専門プログラム」があります。こちらは、大崎市が主催し、小学4年生～中学3年生を対象としているものです。

これらの取り組みを通じて、大崎地域に愛着を持った子どもたちを育成していくとともに、これらに参画する親の世代の意識の醸成にもつなげていきたいと考えています。

また、今後の地域の担い手の中核となる若手農家の意識向上に取り組んでいくことも重要だと考えています。大崎市では、認定新規就農者等を対象として、今後のネットワーク化に向けた「大崎市青年就農ミーティング」を定期的で開催しています。

このような機会を通じて、不安や課題を学びや情報交換を図り、課題を解消していくことを狙いとしています。また、世界農業遺産認定地域の価値について学ぶ機会を設ける等、今後を担う農家の意識向



図-26 （仮称）世界農業遺産副読本



図-27 おおさき生きものクラブの活動状況

表-3 おおさき生きものクラブのプログラム

月	内容 (2019年)
5	春の食べられる植物体験
6	シナイモツゴとゼニタナゴを知ろう!
7	田んぼの生き物調査
8	用水路での生き物調査
9	いぐねの里の自然体験
10	鳴子の里山づくり体験
11	野鳥の見分け方
12	ガン類のねぐら入り観察

上を図る取り組みも行っていきます。

近年は、急速にイノシシによる農地等への被害が拡大しています。2017年には大崎市でのイノシシの捕獲頭数はなかったのが、急速な生息域の拡大により、2019年には200頭弱の捕獲があるなど、地域の環境が大きく変化しています。このような状況に適切に対応していくことが喫緊の課題です。このため、鳥獣被害対策実施隊を中心として、地域の環境を守る人材を育成し、地域の環境や動物の生態への理解を深めながら、対応を取っているところです。

また、大崎耕土の半分以上を森林が占め、水源地である森林の保全・活用は重要な課題です。持続的に多面的機能を発揮できるよう、新たな森林管理制度である「森林経営管理法」の施行に伴い、他の自治体に先駆けて「地域林政アドバイザー」を設置し、持続可能な森林管理を行っていけるような体制も整えたところです。

### (3) 世界農業遺産＝地方創生の柱

大崎地域は、2019年10月12～13日の台風第19号において甚大な被害を受けました。同時に、大崎耕土の巧みな水管理のシステムを活用して、遊水地に水を引き込むことで、被害軽減の効果を発揮する等、改めて、先人たちが築いたシステムの有効性を感じることができたところです。

世界農業遺産の認定の意義は、歴史的建造物などの遺産を認定する制度とは異なり、ただ守ることを目的としたものではありません。世界農業遺産に認定される要素の中心となる文化、景観、技術などが引き継がれるためには、言うまでもなく、そこに暮らす人々の営みがこれからも続いていくことが不可欠であり、この営みの継続をどのように図っていくかという観点がより一層重要になってくると考えています。

先に国内に飛来するマガンの9割が大崎地域に来ることをご紹介しましたが、かつてマガンは全国どこでも見られた渡り鳥でした。開発等でマガンの生息域が狭められていく中、大崎地域の方々はマガンが捕食する場を確保できるよう、ふゆみずたんぼを積極的に進めていきました。そのような取り組みがあり、マガンが大崎を選んでくれたのであり、決して偶然マガンが大崎地域に飛来しているのではないのです。ある専門家は、世界農業遺産の本質は「過去ではなく未来」だと言っています。世界農業遺産の認定を契機とした取り組みは、まさに、将来にわたって活力ある社会をつくっていく地方創生の取り組みそのものであると言えます。

そのような中、世界農業遺産を契機とした地方創生の取り組みを応援していただく方々との関係は極めて重要です。

その事例として、一つはふるさと納税があります。大崎市は、ふるさと納税を行っていただく際、使い道（事業メニュー）の選択項目に「世界農業遺産の資源を保全するための事業」という項目を設けています。持続可能な地域づくりに対して共感をいただいているものの直接的な支援は難しいという方でも、ふるさと納税という形で多くの方々から応援をいただいています。

次に、企業との連携です。例えば、世界農業遺産に認定された1市4町と大手飲料メーカーで協定を結び、売り上げの一部を大崎耕土の環境の保全等への取り組みへの寄付をしていただくという仕組みが始まっています。一見、世界農業遺産とは関係のない企業ではありますが、行政側としては活動資金の持続的な確保につながり、一方、企業側からすると、持続可能な地域づくりの取り組みを応援することを通じて企業イメージを高めるとともに、新規に自動販売機を導入する際の営業上のメリットにもなるということであり、双方 win-win の関係



図-28 台風19号での遊水地への水の引込み



図-29 世界農業遺産ラッピングの自動販売機

を築いていけるものと考えています。

大崎地域は、ものづくり関連企業や自動車関連企業、食品関連企業など、多くの業態の企業が立脚しています。多くの企業からは、世界農業遺産を応援したいとの声をいただいております。それぞれの業態に応じて多種多様な関り方があると考えています。柔軟な発想で、地域住民やNPO、観光関連事業者のみならず、産業界も一体となった取り組みにしたいと考えています。

現在、企業や自治体などでのSDGsの取り組みが脚光を浴びています。大崎市においても2019年度中の改定を予定している「環境基本計画」において、自然環境や生活環境等の各項目における今後10年の目標と、それに関連するSDGs目標を記載し、国際的な動きとも連動した施策を推進していく考えです。

大崎耕土では、持続可能な取り組みを数百年にわたり行ってきており、それらの価値が認められ、世界農業遺産認定に至ったものです。この機会に、改めて先人の営みに敬意を表し、そこに現代のニーズに沿ったアレンジを加えつつ、魅力ある地域づくりを進めていきます。

東北地方は、ナショナルジオグラフィック誌により、2020年に世界で訪れるべき旅行先として選定され、また、世界的に人気の高い旅行ガイドブックのロンリープラネットにおいても、訪れるべき世界の10地域の第3位に選定され、注目が集まっています。このようなインバウンドの流れもしっかりと取り込みながら、世界農業遺産に認定された地域資源を活かしながら、関係人口・交流人口の拡大を図り、持続可能で誇りある地域にして参ります。



地球市民による地域資源を活用した  
SDGs・ESDカリキュラム開発

---

# 只見町教育委員会

# ユネスコエコパークを軸にした 持続可能な交流人口づくり

## (1) ユネスコスクールとしての「只見学」実践カリキュラム

### 1 只見町の概要

只見町は、福島県の南西部に位置し新潟県と接している。町の総面積747km<sup>2</sup>の約94%が山林で占められている中山間地域である。人口は、現在4,200人台で高齢化率も46%に達している。冬の積雪は2~3mにもなる豪雪地帯でもある。

しかし、この豪雪がもたらした厳しくも豊かな自然と、そこに感謝と畏敬の念をもって暮らしてきた人々の豊かな共生、その中で生まれた豊かな文化が認められ、平成26年にユネスコエコパークに認定された。



只見町の位置

### 2 ユネスコスクールとしての取り組み

平成26年度から28年度までに只見町3小学校と1中学校がユネスコスクールに認定され、それぞれの地域の特性とよさを生かしながら、同じ目標をもって取り組んでいる。世界の平和を守っていく人材育成の土台として、故郷只見愛を育み、故郷の豊かな存続に寄与できる人材を育てるESDの実践を通して、地域を愛し、誇りに思う子どもの育成を目指している。



雪食地形が見られる只見の山々

### 3 只見学の推進

子どもから大人まで地域に学んで理解を深めながら、地域の価値を再発見してまちづくりを担う人材を育てる「只見学」を進めるため、平成22年に只見学懇談会が設置された。そこで審議された方針のもと、14名の町民からなる只見学専門分野部会が置かれ、3年間の協議を経て、『只見おもしろ学ガイドブック』が刊行された。このガイドブックは全戸に配付されるとともに町内小中学校及び只見高校にも寄贈され、地域理解学習に欠かせない参考書となっている。

平成27年からは只見学の一層の浸透を図るため、「只見おもしろ学検定」が実施され、小学生から大人まで、それぞれのレベルに応じた検定に挑戦している。

また、小中学校においては、総合的な学習の時間等で行われる地域理解学習を「只見学」とし、ESDと密接に関連付けながら各学校の教育計画の中で取り組んでいる。



『只見学おもしろ学  
ガイドブック (改訂版)』



『只見おもしろ学検定の  
お知らせ』

## 4 海洋教育を付加した ESD

只見町は東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センターと提携し、町内小中学校が連携して、海洋教育の視点を付加した ESD に取り組んでいる。

只見に流れる川も、降る雪も、豊かな自然を支える命の水として海とつながっており、地球規模の水の循環という広く大きな視点で只見愛をさらに深め、「故郷を愛することは海や地球を守ること、世界を幸せにすること」であるという意識を児童・生徒がもつことができるようになることを目指している。

## 5 只見町の小中学校の取り組み

### ● 只見小学校

只見小学校では、テーマを「ふるさと只見、そして日本の未来を拓くたくましい子どもの育成」とし、生活科や総合的な学習の時間を中心に海洋教育を付加した ESD 只見学を実践している。これは、「只見の自然と共生することが水循環を通して海を守ることにつながること」「八十里越（国道289号）の開通に伴い、日本海とひと・もの・文化の結び付きがより一層強くなること」を学び、将来の町の在り方を考え、自己実現や社会貢献のための実践力を育む取り組みである。

各学年のテーマを、1年「只見の自然を感じよう」、2年「只見の人や自然を感じよう」、3年「只見の森の四季」、4年「海とともにある只見の食文化」、5年「ユネスコエコパークのまち只見の水と海」、6年「只見町の将来を提案する～海とつながり、世界と結びつく～」とし、体験的・探究的な学習を進めている。

また、全校生で取り組む3つの体験活動、「田子倉湖散策（モーターボートに乗って、田子倉湖の自然を体感する活動）」、「八十里を越えて海へ（国道289号工事の進捗状況を確認し、日本海を近くに感じるための活動）」、「ふるさと登山（只見の山を登り、自然のすばらしさを知る活動）」と各学年の海洋教育を結び付け、更なる授業の充実を図っている。



### 全校生での活動「田子倉湖散策」

全校生でモーターボートに乗り、普段は行くことのできない田子倉湖の奥まで散策した。田子倉湖の水が日本海に流れることに思いを巡らすことができた。

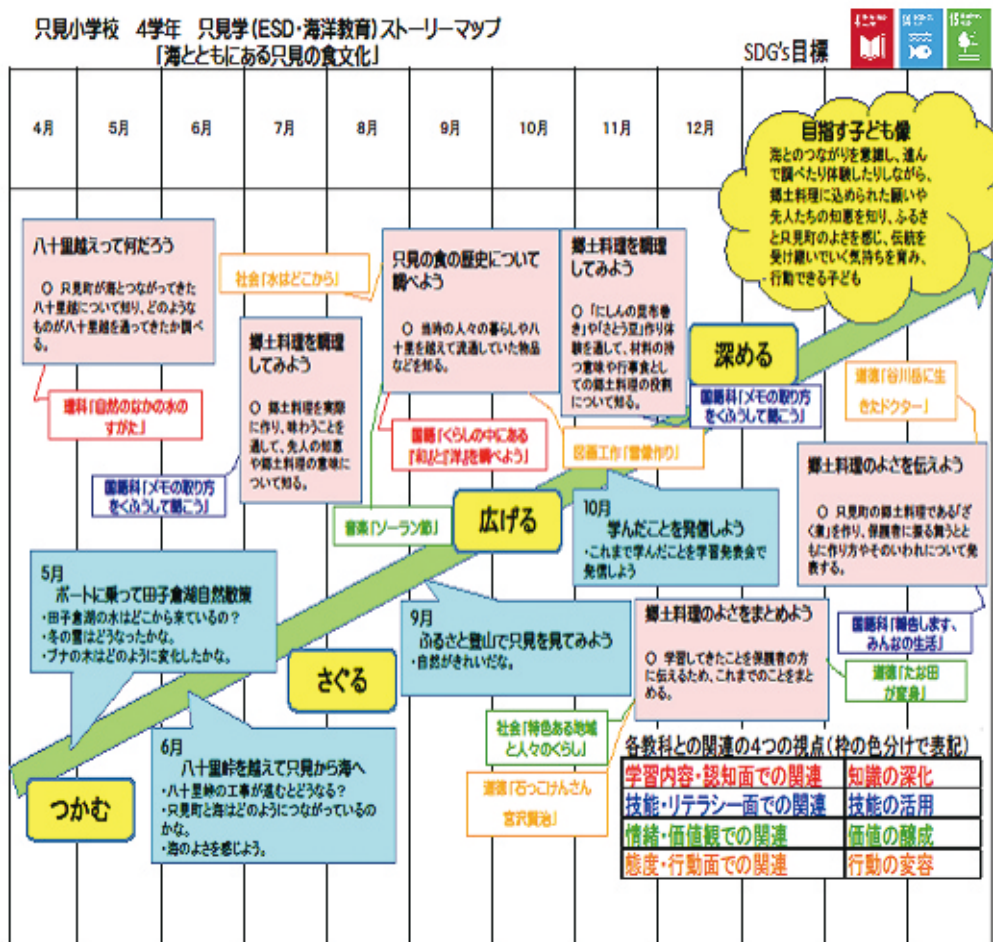


### 全校生での活動「ふるさと登山」

低学年、中学年、高学年に分かれて活動した。只見の自然を満喫しながら、植物、生き物、沢の水にふれながら、山と海との水の循環を実感することができた。

# 学年ごとにSDG sの目標を位置付けた『ストーリーマップ』

各教科との関連やねらいが一つにまとめられているため、合科的な指導、ゆとりある充実した活動につながっている。



## ● 朝日小学校

朝日小学校ではこれまで、ESDを「将来にわたって、持続可能な只見町、国際社会を構築する担い手を育むための教育」と捉え、生活科や総合的な学習の時間における只見の「人・もの・こと」に直接ふれる郷土学習「只見学」を中核として各教科、特別活動と関連を図りながら実践を重ねてきた。

低学年においては、身近な自然や町のよさ、自慢したいことについて自ら調べ、ふれあう活動を行った。只見の環境の素晴らしさや、それに携わる人々の努力などに気付くことができ、海洋教育へのベースづくりを行うことができた。

中学年においては只見町の自然に実際にふれたり、ゲストティーチャーの話を聞いたりすることで美しい自然や多くの生き物を支えている豊かな水の存在に気付くことができた。また、水の循環について理解したことで、海と自分たちの生活とのつながりを意識できるようになってきた。

高学年においては、只見町の現状と課題にも目を向け、只見町の未来について考えてきた。只見町と海辺の地域との共通点や相違点を捉えたり、海辺の地域の取り組みを只見町で生かすことができなないかを考えたりすることで、子どもたちの視野を広げることができた。





田子倉湖周遊体験や恵みの森・癒しの森散策、尾瀬への遠足などの体験活動を通して、只見の自然の保水力の高さや奥深さを体感することができるようにしている。

明和地区には、県重要無形文化財に指定されている数百年の歴史をもつ伝統芸能「小林早乙女踊り」「梁取神楽」が連綿と受け継がれており、保存会を中心に今でも毎年欠かさず続けられている。平成26年度から3年生が「小林早乙女踊り」、4年生が「梁取神楽」、1・2年生は「大倉八木節」を教育課程に位置付けて体験している。この取り組みは、児童の「故郷を誇りに思う気持ち」を育てるとともに、地域と学校のよりよい関係の構築へとつながっている。



「梁取神楽」の発表

**Climbing Routes** ㊦  
第4学年テーマ▶水とのかかわり

目指す児童像  
只見の自然を体験をもつて鳥と探え、大空に飛んでいこうとする態度をもつ児童。  
水の流れるところまで積極的に視野を広げること、導線問題を解くための訓練を  
て取り、身並なところから取り込んでいこうとする態度をもつ児童。

月	総合的な学習の時間	各教科等との関連の視点				Eでつ たい 力・態 度
		知識の深化 学習内容・総括	技能の活用 技能・学習力	価値の醸成 情緒・態度	行動の改善 態度・行動	
4	【身近な地域の水の循環について知ろう】㊦ ・只見を流れる川について知ろう					
5	・地域の水の循環について考えよう					
6	・川の水の循環を調べる	社【水はどこから流れているのか】 水の循環について知る	国【みんなで新聞を作る】 情報の検索			
7	○尾瀬遠足				行▶尾瀬遠足 環境保全	
8						
9	【只見町の自然について知ろう】㊦ ・ブナ森の役割について考えよう ○癒しの森散策		国【わたしの考えたこと】 文章構成の仕方		読【新聞の読み方】 ブナ森の役割	
10	・只見町の川の水質を調査しよう ○学習発表会	社【おこなわれたお祭りに水を引く】 大倉地区水産振興		道【自然や動物を大切に】 自然愛護		①多面的、総合的に考える力
11	【自然を守る取り組みについて考えよう】㊦ ・自然を守る取り組みについて気づく。 ・只見町の自然を守るためにできることを考える	理【水のすがたと循環】 水の循環変化				②多面的、総合的に考える力
12	○只見おもしろ学検定	社【日本地図を広げて】 ・47都道府県の特徴や名所と位置 理【自然のつながり】 ・水の自然循環と循環				
1			体▶スキー 習の活用			
2	○明和っ子習祭り ○伝統芸能発表会			道【石っけんさん宮沢賢治】 自然愛護		
3	【身近な地域の水の循環について知ろう】 只見町を流れる川の流れについて知ることを通じて、川の水はどこからきてどこへいくのかを考える。只見町の地下水の利用についても知ることで只見町の水の循環についての意識ももたせる。また、水の循環について考え、尾瀬遠足への準備付けを行う。 【只見町の自然について考えよう】 癒しの森散策や伊東川の水質調査をすることを通して、只見町の自然について理解を深める。只見町の自然の豊かさを体感し、自然を守る取り組みについて考えをつなげていく。 【自然を守る取り組みについて考えよう】 川の流れをたどり、海とのつながりを実感し、只見町の自然について理解を深めたことを通じて、自然を守るための取り組みについて考えたり、身近な自然を守っていくこととする気持ちを高めたりする。					

只見町を流れる川の水がきれいだと全員の児童が思っているわけではないことや只見町の自然豊かな場所では見られない生物の貴重さに気づいていない児童が多いことから、多くの児童が只見町の自然の豊かさの価値に気づいていない。

他教科と関連して知識を得たり、実際に身近な地域の自然に触れたりすることを通して、町の貴重で豊かな自然について知り、それらを守ろうとする意識を高めることができる。

「総合的な学習の時間」のテーマと各教科との関連を示した『Climbing Routes』

## ● 只見中学校

只見中学校では、「水の都只見町からの発信」をテーマとし、総合学習や社会科の時間を利用して海洋教育の視点を付加したESDを行っている。只見中学校の主な取り組みは次の3点である。

### (1) 地域合同防災訓練

### (2) 海洋ゴミクリーン作戦

### (3) 水の都から海の都へプロジェクト

どの活動も生徒の健全育成だけでなく、グローバルな視点から只見町を考え、持続可能な社会の担い手となる生徒を育成していくためには、欠かせないものである。

只見町は2011年の豪雨災害を経験した。このことを踏まえ、只見中学校を会場にして小学校と地区振興センターと連携、協働し地域合同防災訓練を行っている。この訓練により、地域コミュニティの強化だけでなく、児童生徒の健全育成にも寄与していると言える。この活動を通して、地域で子どもたちを育てようという考えが強まっているのも確かである。

水を利用し、水によって生き、水を敬うことで只見町をより深く学ぶことにつながる。自然環境を大切にしながら、産業の発展を望み、数十年後も持続可能な社会を形成することが町の課題であり、子どもたちに教育していかなければならないことである。ここに焦点を当てて学習を続けていきたい。

## ○ 地域合同防災訓練

小学生の登校時間に合わせて地域の防災放送で呼びかけ、中学校に避難する。中学生が避難経路に立ち、誘導を行い地域の方も参加している。実際に想定して少量の水を使っておにぎりをつくり、避難してきた人たちに配っている。消防署員の協力によりAEDの講習会を始め、役場の防災担当者の指導を受けながら、簡易テントの設営を行い有事に備えている。

この行事の主たる目的は人命救助と「自助・共助・公助」を学ぶことにあるが、様々な活動を通して、世代を超えた協力が見られた。



近くにあるもので担架をつくる



地域の方とおにぎりづくり

## ○ 海洋ゴミクリーン作戦

毎日の生活で海を意識して生活することがなく、生徒は魚を食べても食材の一部としか考えていない。今回は海辺のゴミ拾い活動と、海での魚釣り体験を行った。会場は上越市海洋フィッシングセンター内の埠頭で、全員がフグなどを釣ることができ、海の生物について興味をもつことができた。海洋ゴミクリーン作戦では、釣り場近くで約一時間の海洋ゴミ拾いを行った。





海釣り体験



海外からと思われるペットボトル

### ○ 水の都から海の都へプロジェクト

今年度のこれからの取り組みとして、「水の都から海の都へのプロジェクト」を予定している。このプロジェクトは、海洋生物（ウニ）の飼育を通して只見と海の関係を考えるプロジェクトである。只見中学校では、関西方面に修学旅行を実施している。来年度に関しては和歌山県串本町を予定しており、海洋教育を行う予定にしている。ここではユネスコスクールの串本古座高校との交流と、11月から飼育する予定のウニを持参し、黒潮に放流する予定である。

## ● 只見高等学校

ユネスコエコパークの町の高校として、また、小・中と連携しながら、一貫したESDの取り組みについて提唱してきた。ESDの取り組みは、地域と連携しながら生徒の豊かな心と、主体的で協働的な態度、深く考える力を育て、未来を切り拓く力にもつながる大きな学びとなる。今回の県立高校改革でも地域協働連携校としての使命を持って、その魅力化を図っていかねばならない。

ついに今年から「地域について学び、考え、愛する人になってほしい、これからの生き方につなげてほしい」との願いから、只見高校にも地域学習を取り入れてもらうことができた。地域の方との触れ合いを通して、留学生にとっては第二の故郷、只見中卒業生にはさらに故郷の良さを学んでほしい。そして課題を見つめ、未来を創造する力につなげてほしいと期待している。



地域の方に指導を受けながら田植え体験学習

### ○ 325km 第9回 R289フルコース踏破〈自転車〉

このイベントは国道289号の早期全線開通と、自然の宝庫である八十里越周辺の環境保全、有効活用の推進を発信しようとして2010年より只見振興センターの主催で行っているもの。

今年は7月30日に福島県いわき市「勿来の関」をスタートし、2日間かけて新潟県「新潟県庁」までの道のりを踏破した。只見高校生と三条市の高校生が参加しR289をつないだ。



## (2) エコパークを活用した交流人口の育成プログラム

### 只見町山村教育留学

福島県立只見高校は昭和39年の独立昇格以来、有為な人材を多数輩出するとともに、地域行事にも積極的に参加・協力し、地域住民に元気と活力を与えてきている。只見町にとって、只見高校は、町内唯一の高等学校のみならず、地域振興の役割も担っているのである。

しかし、少子高齢化が進行し、只見町の小中学生の減少とともに只見高校への入学者も減少してきた。このようなことから只見町は、只見高校の地域における役割を重視し、その存続のために積極的に支援をしてきた。

その一つが只見町山村教育留学制度である。平成14年から、入学生の安定的確保を図るため県内外からの只見高校への入学希望者を募るようにした。以来、県内外から、これまでに150名以上の留学生を受け入れ、只見高校を卒業している。令和元年12月時点では、40名の留学生が親元を離れ、男子寮と女子寮に分かれて生活している。

山村教育留学生への具体的な支援としては、

- 寮には土・日も在寮することができる（年末・年始は除く）
- 寮費は食費のみの負担
- 帰省の際の交通費補助
- 特別料金でのスキー場利用
- 地域行事への参加等、地元住民との交流機会の創出等がある。

只見高校は地域の宝であり、地域の振興のために必要不可欠である。只見町は人口減少、高齢化が年を追うごとに深刻化し、地域コミュニティの保持すら困難になりつつある。山村教育留学制度による入学生により、只見高校の存続と活性化、只見町の交流人口の拡大につながることを期待されている。



山村教育留学生と地元住民との交流  
 (『広報ただみ 2019 12月号』より)

山村教育留学生募集のお知らせ

### (3) 地域の資源を活用した持続可能な地域づくりプログラム

#### 地域産業づくり～合同会社ねっかの設立～

合同会社ねっかは平成28年7月、只見町の米農家5軒で設立され、「米焼酎ねっか」を製造・販売している。「ねっか」は、“私たちの故郷がいつまでも故郷であり続けますように。”という深い祈りを込めながら、全量が只見の米でつくられており、自称“日本一小さな蒸留所”から生まれた米焼酎である。

平成29年に製造・販売されてからは、国際的な賞を毎年受賞しており、その味、質のよさは世界的に認められている。JGAP 認証を取得し、輸出販売もしている。

また、令和元年11月には、復興省による『「新しい東北」復興ビジネスコンテスト2019』で、合同会社ねっかの事業である「田園風景を次世代に。米農家がつくる世界一和食に合う米焼酎」が、最高賞の大賞を受賞した。

#### 『合同会社 ねっか』について



#### 「地域の想いをかたちにし、楽しいを次世代へつなぐ」

##### 【理念】

只見を含む奥会津の素材・人を中心として、地域の新しい価値を生み出していきます。只見の新しいライフスタイルを提供・確立することによって雇用の場を生み出していきます。人と人とのつながりを大切にし、地域誘客、都市と只見の交流人口を増やしていきます。次の世代が安心して生活できる地域づくりを目指します。

##### 【3つのコンセプト】

1. 豊かな只見・奥会津の魅力を伝える
2. 未来へつながる活力のある人材育成
3. みんなが楽しめる只見版ライフスタイルの提案

##### 【ねっかの取り組み】

- 農業にかかわる取り組み
  - ・只見産米のブランド化事業
  - ・只見の田畑を守る取り組み
- 地域・集落との取り組み 空き家の利活用
  - ・梁取集落との協定団体
  - ・その他、行政と連携をし地域と共に歩む取り組み

##### 【ねっかとは】

只見町や南会津南郷地域で使用する方言で、「ねっかさすけねえー」など、「まったく」「ぜんぜん」を意味する、強調するとき使用する言葉です。弊社では、可能性を否定せず前向きな気持ちでものごとをとらえ、「ねっかさすけねえー(No problem at all)」の精神で歩んでいきたいと考えております。

(合同会社ねっか HP より転載)

地域の景色と想いがみえる  
只見生まれの米焼酎



自分たちでつくる  
100%只見産米のみ使用

米焼酎「ねっか」は全て只見の米を使用し、只見の水でつくることにこだわって製造されている。そこには、設立者たちの、“若い人に只見にもどってきてほしい”、“地元の雇用を増やしたい”という思いがある。

ユネスコエコパークに認定された只見町の世界に誇れる豊かな自然。合同会社ねっかは、この先祖から受け継いだ土地を守っていくために設立されたとも言える。

このようなことから、合同会社ねっかは地域での取り組みを重視している。小学生を対象に米作りを体験、収穫した米で造った焼酎を児童が二十歳になったときに贈る活動や、希望者を募り、田植え・稲刈り体験をする「KARIYASU」等、地産地消、地域貢献、将来への継承のための活動を行っている。

また、ゲストティーチャーとして小学校の授業に参加することもあり、小学生にとって、地元の農業や自然についてのすばらしさに改めて気付くことのできる貴重な学びの機会となっている。



#### 米焼酎 ねっか

100% 自分たちで育てた米を使用した、香り高く、米のうまみを感じられる米焼酎です。香りの決め手となる酵母は福島県で開発した「きらめき酵母」を使用。今までに無い華やかな吟醸香が特徴です。  
CINVE2019 焼酎部門最高賞受賞  
HKIWSC 2018 年 焼酎部門ゴールドメダル受賞  
IWSC2018・2017 年焼酎部門 二年連続シルバーメダル受賞

(合同会社ねっか HP より転載)



地元小学校にゲストティーチャーとして招かれた合同会社「ねっか」の代表社員 脇坂育弘さん



田植え・稲刈り体験 (明和小5年生)

## ～ブナと生きる 雪と暮らす「自然首都・只見」伝承産品～

人と自然との共生のモデル地域であるユネスコエコパークに登録されている只見町は、この地域の自然環境、生物多様性の保護・保全とそれらを拠り所とした地域の伝統産業、生活・文化の継承、発展に資するため、様々な取り組みを展開している。「自然首都・只見」伝承産品の認定もその一つである。

只見町は、日本有数の豪雪地帯である。例年、12月以降、野山は雪に覆われる。1月になると雪の日が続き、積雪を増す。雪に閉ざされる冬に、人々は習い事などで教養を高めた。

また、つる細工をはじめとする屋内の手仕事で数々の生活用品などをつくり、その技術が今日まで継承されている。

3小学校で、2月に各地区の保存会の皆様にお世話になり、つる細工体験学習を行い、自分が作った世界でただ1つのかごを製作している。

このように、雪深い大自然の恵みを受けた天然資源や農産物を原材料として、只見町の伝統的な生活・文化の中でつくられてきた産品をブランド化し、町のお土産品として認定したのが「自然首都・只見」伝承産品である。これら伝承産品により、只見地域の「伝統的な資源利用の継承・発展」と「地場産業の育成」を図り、地域経済の活性化につながることを期待されている。

只見町の厳正な審査を経て認定された「自然首都・只見」伝承産品は、下のマークが付けられ、販売されている。



伝承産品を紹介しているパンフレット  
(只見町役場 地域創生課)

### 「自然首都・只見」伝承産品ブランド化支援事業 「自然首都・只見」伝承産品

とらけしいのはちみつ【三瓶産地】	4	かじご焼き炭の消臭剤	10
泉太のどぶろく【民権やまかのうや】	5	【養生ネイチャーガイドクラブ】	10
あめ・こくわジャム・まるごと山なしジャム【金津産地】	5	くももじの楊枝と箸【日黒吉崎】	11
トキあねの干しわらび【佐藤産地】	6	ぜんまい・綿毛のコースター	11
凍み餅・凍み大根【新地リツ】	6	【つむぎやkaku】	11
あめ【とちぼっこ】	7	またたぎのアクセサリー【またたぎ屋】	12
凍み餅・打ち豆【じねんと】	7	タルミ皮細工・ヒロロ細工など	12
みんなで作ったはげかけ米【BUSESAPUR】	8	【明和産品保存会】	12
秘伝 青豆みそ【日黒産地】	8	手紡ぎぜんまい・綿毛糸のコースター・	13
じゅうねん油【げんき村】	9	名刺入れ・消臭袋 手紡ぎぜんまい・綿	13
手染 ぶなの着染め てぬい...	9	刷書き毛鉤【風光舎】	13
きんちやく袋【ぶないろくらぶ】	9	アケビつる細工・タルミ皮細工など	13
只見の純木小笠【源沢木工】	10	【只見産品保存会】	13
		只見の木工製品【矢沢工舎】	14
		タタサカップ【Zukku Design Wood Working】	14

パンフレットで紹介されている伝承産品



伝承産品のマーク



観光まちづくり協会で販売されている伝承産品

ESD／ユネスコスクール・東北コンソーシアム  
2019 年度成果報告書

## 地球市民による地域資源を活用した SDGs・ESDカリキュラム開発



この冊子は「水なし印刷」により  
印刷しております。



環境にやさしい植物油インキ  
「VEGETABLE OIL INK」で  
印刷しております。